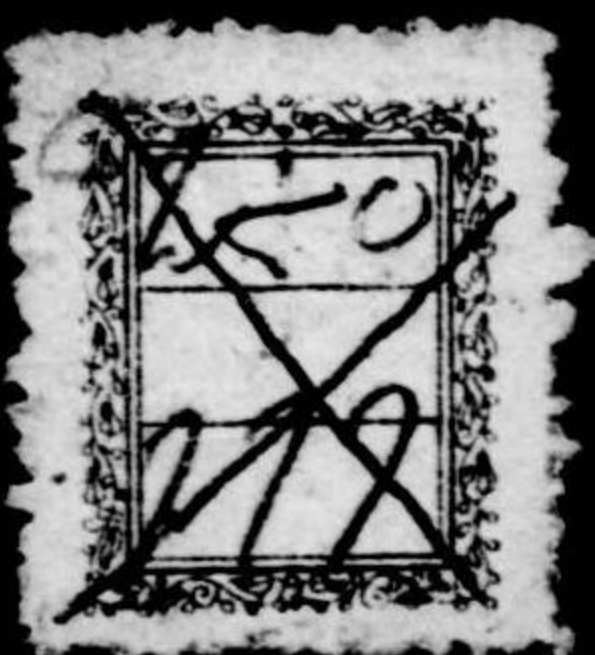


X  
複写



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18</sup> 11 12 13 14 15

始





精神療法講義錄

第一卷

×



...



特107  
70



持104  
40

古屋鐵石講述



精神療法講義錄

東京精神研究會

第壹輯  
821  
內交



## 自序

大凡何事にても物質萬能主義は過去の思想に屬し、近頃は精神主義に傾けり、殊に精神療法は非常に發展し大流行を來たした、是は藥物療法を如何程試みても癒らなかつた大病人が、半信半疑で精神療法を受けたるに、意外にも忽然として全快した、其事實が全国各地に現れた、世人がそれを知りて精神療法を受けんとする者益々多くなり、爲に精神療法は日を追て隆盛に赴く傾向である。

醫學界に於ても病氣の性質によりては、藥物療法は全く無効で精神療法に限る場合あることを認め、之を應用し偉大の効果を擧げて居る、從て之が研究に腐心しつゝあ



る醫學者亦尠くない、殊に歐米の文明國に於ては、新らしき精神療法を考出して非常に盛である、爰に於て我國に於ても、各地に種々の精神療法が顯れ、互に其自家廣告に勉めつゝある、世人は其種類の多きと其名稱の新奇とに迷ひ、其眞價の判断に苦んでゐる。

講述者は精神療法を行ふ看板を公然掲げ、毎日病人を治療しつゝあること茲に拾有六年、其間全世界に涉りて各種の精神療法を殆んど漏なく研究し、實地人に試みて眞に偉大の効果ある療法は何なるか、眞に偉大の効果ある良法見當らば、何人の創設せる療法にして、又其名稱は何と呼べるゝも其療法を採て以て行ひ、多くの病人を救済し國恩に酬ゆる一端ともなし度きものよと決意して研

究を怠らなかつた。

多年實驗の結果、種々の精神療法中眞に偉大の効果を舉ぐる良法を認め、或は其名稱奇抜にして、廣告は立派なるも、其實質は貧弱なるものがある、實質は陳腐なる舊法なるに、唯妙な理論を附して新發見の療法なりと主張するものもある。

講述者は是等各種の精神療法に就て公平無私の態度を以て、其各種の精神療法の實質を明白にし、各其療法を行ふ法を平易に詳細に講述し、併せて講述者が改良し工風したる各種の精神療法をも併述した、故に之を讀めば初學者にても講述せる二十四大療法を、悉く實地に行ひ自己亦は他人の病癰を癒すことを得、特に各種の精神療法



の長所及短所を悟らしめんことに勉めた、依て其短を捨て長を採て以て之を應用し研究しますれば、眞に大効を擧げ得る療法を修得し重病を全治し國益を増進することが出来ると思ひます。

大正七戊午初冬日

古屋鐵石識

## 例言

- 一、本書に講述せる二十四大精神療法は、悉く彼此交叉し居る、故に單に或一療法のみを讀で直に應用することは不可能には非ざるも、其れでは、不明不解の點多くして充分の効果を擧げ難い、故に二十四大療法は悉く熟讀翫味し、各療法の修養を積み、而して後に第一卷より順序に第二十四卷に及びて實行するのが順序である。
- 二、本書を講述するに當り、先覺創設の療法を紹介せる點は其先覺の説を抄譯したる所がある、或は全く轉載したる所がある、此點は各其療法創設者に對して偏に感謝する所である。



三、本書に述べし所は總て歸納した要點のみを集めてある、故に一字千金の價値ある點のみである、特に小冊子に數多の療法を講述せるが故、語は簡短であるが、其價値は確に大冊子を凌駕する特色あることを自信してゐる。

四、學者若し本書を御覽の上、斯る點は斯々に改訂するがよい、と御教示被下ますれば謹で改訂し益々完全に近きものとせんことを神明に誓ひます。

大正七年戊午初冬日

古屋鐵石識

# 精神療法講義

## 第一輯目次

第一卷	催眠術療法	一
第一章	精神療法とは何ぞや	一
第二章	催眠術療法とは何ぞや	二
第三章	催眠術療法家に必要の無我修養法	七
第四章	催眠術療法で癒る病氣	九
第五章	催眠術療法診察法	二二
第六章	催眠術療法を行ふ法	一四
第七章	催眠術療法受術者修養法	二二
第二卷	暗示術療法	二五



第一章 暗示術療法とは何ぞや……………二五

第二章 暗示術療法練習法……………二六

第三章 暗示術療法を行ふ法……………二九

**第三卷 プラナ療法……………三五**

第一章 プラナ療法とは何ぞや……………三五

第二章 プラナ療法の原理……………三六

第三章 プラナ療法を行ふ法……………三八

**第四卷 静坐呼吸療法……………四五**

第一章 静坐呼吸療法とは何ぞや……………四五

第二章 藤田式静坐呼吸療法……………四七

第三章 岡田式静坐呼吸療法……………四九

第四章 古屋式静坐呼吸療法……………五三

**第五卷 自己催眠療法……………五九**

第一章 自己催眠療法とは何ぞや……………五九

第二章 自己催眠療法豫備修養法……………六〇

第三章 自己催眠療法を行ふ法……………六五

**第六卷 催眠遠隔療法……………六九**

第一章 催眠遠隔療法とは何ぞや……………六九

第二章 催眠遠隔療法の原理……………七一

第三章 催眠遠隔療法を行ふ法……………七四

第四章 催眠遠隔療法受術者修養法……………七六

目次終



明治天皇御製

曇りなき心のその知らるゝは  
ことばの玉の光りなりけり  
よきをとり悪きをすて、外國に  
劣らぬ國となすよしもかな

精神療法講義

古屋鐵石講述

第一卷 催眠術療法

第一章 精神療法とは何ぞや

精神療法と物  
質療法

精神療法とは物質療法薬物療法外科手術等の理學的及び化學的療法に對する名稱である物質療法は主として肉體の異常を癒して精神の異常を去る法である精神療法は精神の異常を癒して精神力によりて肉體の異常を癒す法である元來吾人の精神には病氣を癒す力が具はつて居るが普通人の精神は雜念妄想に執着して居る爲に癒し得べき精神力又は靈力を發揮することが出来ぬのである精神療法を廣義に解釋すれば精神療法所の玄關術者の服装態度治療室の装置等病人周圍の環境は悉く精神療法であ



廣義の精神療法と狭義の精神療法

精神療法の名種々ある所以

精神は力である

催眠術療法は病人の心身を左右する

感受性亢進説

る、狭義の精神療法は術者と被術者との精神作用又は心靈作用に依りて、心身の病氣を癒す法である、私は之より狭義の精神療法を講述する、例へば爰に煩悶懊惱せる病人ありとせんか、術者或る手段を用ひて其煩悶懊惱の起れる源泉を探知し、其源泉を消滅さす、然ると其末流たる煩悶懊惱は消散して歡天地喜の人となる、又頭痛がする病人なれば、術者或る方法を用ひて、頭痛は癒つたとの觀念を強く起させ、然ると其觀念の通りに筋肉血液及び細胞は働いて頭痛は消える、之が即ち精神療法である、其強い觀念を起さずる方法、病源を探知し消滅さす方法、手段が種々ある、其原理と方法とが異なるに従つて、精神療法の名稱を異にす、其名稱種々ありて、一々列挙し盡す事は出来ません、其中著名なる者を以下順次述べませう。

### 第二章 催眠術療法とは何ぞや

精神は脳細胞の物質活動に伴なふ處の何等の力なき影の如きものにあらざして、實に身體の生理活動を左右する一種の力である、催眠術は精神作用

を左右する顯著なる方法である、精神と身體とは常に相關係して居り、精神が左右せらるれば肉體も共に左右せらる、例へば病人を椅子に倚らせ、若しくは『ベット』に横臥せしめて、術者が或る莊嚴なる動作をすると病人の精神作用は術者の意の儘に左右せられて、一種不思議な状態になり、種々な珍らしい現象を呈し、且病人の精神及び身體上の疾患をして全癒せしむることが出来る、之が即ち催眠術治療である、此有益なる催眠術療法を更に解し易からしめんが爲めに、次に其定義を擧げ説明させ、定義に二種ある、一を感受性亢進説と云ひ、他を潜在精神活動説と云ふ。

感受性亢進説の定義としては、催眠術療法は病人の暗示感受性を高めて治療の暗示（術者が被術者の心身を變へんと心に思ひたり、言語に發したり）舉動に現はしたりするを暗示と云ふ、尙暗示術療法參照を感應せしむるものである、爰に云ふ感受性とは、術者の暗示をよく受け入る、性質と云ふ意である、術者が病人に向ひて催眠術を行ふ、即ち色々な動作をするのは何が爲めであるかと云ふに結局病人の感受性を高める手段である、催眠せしむ



るのには治療の暗示が能く感應する状態を造るのである、そこで疑問が起るのには術者が更に催眠法の形式を採らない故に病人は眠つた様にならぬ、單に病人の身邊に近づいて重病は癒る病氣は癒つたと暗示すれば、今の今迄沈み鬱いで苦しんで居た病人が全く健全となりて別人の様に、こゝして快活になる、斯る現象を見ると感應性を高める事、即ち催眠術を行はない故に病人は眠つた様にならぬから催眠術療法ではない様に見えるけれども、それは單に感應性を高める爲めに複雑なる手段を採らないこと、病人を眠つた様な状態にせないと云ふに外ならぬ、實際に於ては其病人の感應性は高められ、即ち立派に催眠せしめられて居るのである、其高める方法が真に一瞬間に行はれ且催眠が深くないので氣がつかないのに過ぎない、其證據には暗示が感應するを以て證明せられる、例へば「コップ」に水を注ぐ場合に、「コップ」に水が注がれるのは、其「コップ」の中に空虚があつたからである、若し空虚が少しも無ければ、水は溢れてしまふ、それと同様に催眠即ち感應性が高まつて居なければ暗示は感應しない。

重病突然に全快する

暗示感受性と何ぞや

潜在精神活動

催眠中にありしことを知らぬ道理

暗示が感應し病氣が癒る以上は確に催眠し感受性が高まつて居たのである、即ち「コップ」に空虚があつたと見るのである、其空虚を催眠即ち感受性と見るのである、故に事更に複雑した催眠の形式を行はず、術者が病人を一眼見た其一瞬間に催眠法が行はれ、感受性は高められ、治療の暗示はよく感應し重病も癒るのである、故に催眠術療法は感受性を高めて治療の暗示を感應せしむるものであると云ふのである。

潜在精神活動説の催眠術治療の定義は、催眠術治療は現在精神を無想として、潜在精神を活動せしめて病氣を癒す法である、凡そ人の精神には現在精神と潜在精神との二つがある、吾々が今現に意識しない精神がある、之を潜在精神と稱ふ、深き催眠状態にある者が種々の動作をするは潜在精神の働きによる、其證據には催眠状態中に於て種々なる現象を起す、例へば催眠中外科手術をなし其病人を覺醒すれば催眠中のことを少しも知らずに居る、即ち外科手術を受けしことを知らず然るに再び催眠せしむれば、前の催眠中に外科手術を受けしことを能く記憶して居る、之は丁度吾々が平常の状



催眠中にありしことを知らぬ催眠状態

第一卷 催眠術療法

態即ち現在精神に於て昨日の出来事若しくは去年の出来事を知つて居ると同様な関係である。語り覺醒時は覺醒時で現在精神がズット連絡して居る。催眠時は催眠時で潜在精神がズット連絡して居る。そこでは現在精神を無想にして潜在精神を盛んに活動せしめ以て病氣を癒す法である。と見たのである。併し催眠中のことを覺醒後によく記憶して居る。少活動して居る故である。之は催眠中現在精神が全く無想となり切らず未だ多深き催眠状態を要するも單に、病癩を治療するのみにては左まで深い催眠状態を必要とさせぬ。

以上述べた所の催眠術治療の定義、即ち感受性を高めて治療の暗示を感應せしむるものであるとの定義と顯在精神を無想にして潜在精神を活動せしめて病氣を癒すものであるとの定義は、一個の催眠術治療法を二方面より見た説であつて、何れも眞理であると信ずる。此二説をよく含味すると、催眠術療法は何物であるかよく解し得らるゝことと思ふ。而して此定義に

當て嵌る療法は催眠術療法で當て嵌らぬ療法は其他の療法である事を區別すること出来る。

第三章 催眠術療法家に必要の無我修養法

獨り催眠術療法に限らず、總ての精神療法を行ふときは術者の精神は宇宙の法則態と合致する状態となり初めて偉大の效が擧るのである。即ち術者個人の精神を無我にするのである。其の無我は一瞬間でもよい無我となり居る時間が長ければ長い程よい。無我の時に働く精神力は個人の意志力を減じ盡して、宇宙靈に歸着した状態である。爲めに偉大なる精神力が現はるのである。個人の意志で『何々の病氣を癒し度し』と思ふて、精神力の動くべき目的を定めるのは個人の意志否寧ろ願望である。併し斯る願望は身体的能力によりて果さるゝものではない。斯る願望を念持して無我に入ると、其の精神力が働き出してそれが果されるのである。故に其の精神力の活

無我と宇宙靈



動を喚び出すべき機縁となるものは個人の望力である病を癒す精神力其  
 の物は個人を超越したる靈である、他力的宗教の言葉で申すと、一心不亂に  
 願を掛けて、無我境に入ると、佛力又は神力を現して其願ひを充たさして下  
 さるのである故に其治療的精神力が以何なる過程を経て働き出すものであ  
 るかと言ふ様な事になると、術者其人にさへも解らぬのである、唯不可思議  
 と言ふより外はないのである、依之術者は己が心身を調御して、終には宇宙  
 の本體に冥合せしむる修養をする必要がある、其修養法として印度に於て  
 行はるゝ瑜伽法は最もよいが之は複雑し居りて一寸には述べられず、又獨習  
 にては行はれぬ故に雜作もなき法を述べ先づ物欲を去り、朝夕深呼吸  
 をなし神佛を禮拜し自己催眠を行ふとよい、且つ後に人身自由術療法の卷  
 に至りて述べる護身法と九字の印契を行ふと最もよい修養は極めて平凡で  
 あるが其修養を怠らざれば、終に術者は机上に無機物を置き毫も其無機物  
 に手を觸れずして、精神力のみにて其れを動かす得るに至る、斯く修養を積  
 むと、真に其人は精神療法家たる實力の具りし人である、講述者は精神力の

無機物を動かす精神力

精神療法で癒す病氣

みにて容易に無機物を自在に動かす得る、無機物に手を觸れずして念力丈  
 けにて動かす得る精神力具らば病氣位は何でもなく癒る無機物に手を觸  
 れて居つて動かしたのは駄目である全く少しも手を觸れずして動かす得  
 なければ真に術者たる力はない。

### 第四章 催眠術療法で癒る病氣

精神療法の種類は變りても、其の目的は皆病氣を癒す法である、精神療法は  
 何れの精神療法でも癒し得る病氣又は癒し得ざる病氣は同一である、精神  
 療法で癒らぬ病氣は如何絶對的に癒らぬ病氣は無い、去り乍ら精神療法に  
 適應せる神経系の病氣にても、病氣が非常に重症となれるときは、施術する  
 も輕快せしめ、又は苦痛を除き得るに止まり全治せしむること困難である、  
 泥んや象皮病又は重い肺結核の如きは、全治困難である、然れ共、大概の病氣  
 は治療の道が充分にある、病氣によりては藥物療法を兼ね行ふがよい、梅毒  
 又は手術を要する病氣の如き即ち其れである。



先天後天、急性慢性、機能性を問はず

催眠術療法適用症

病氣は先天的と後天的とを問はず、急性と慢性とを問はず、機能的と機能的とを問はず癒し得る、講述者が多年實驗せる結果、確に催眠術療法で癒し得たる病氣は左の如くである。

惡癖 吃音、寢小便、小膽、強迫、觀念、癖、記憶減弱、癖、思考力衰、判斷力衰、意思薄弱、赤面、癖、船車暈、癖、飲酒癖、喫煙癖、潔癖、倦怠、癖、交際下手癖。

腦病、脊髄病、頭痛、頭重、耳鳴、脊柱彎曲症。

神經病 神經痛、神經過敏、諸種の麻痺、諸種の痙攣、神經衰弱、歇私的里、不眠症、書癡、手足不隨、知覺異常、癡麻質斯脚氣、癲癩、諸種の癩癬。

精神病 妄想、狂鬱、憂鬱、狂。

胃腸病 消化不良、胃痙攣、胃擴張、腸胃加答兒、便秘、嘔吐。

呼吸器病 喘息、咽喉加答兒。

眼病 眼精疲勞、色盲、夜盲症、近視、斜視。

泌尿生殖器病 子宮病、月經異常、早漏、陰萎、遺精。

全身病 諸種の貧血、諸種の慢性中。

此外尙外科手術を要せざる病人、殊に藥のきゝめなき病人には效力がある、又如何なる病氣にても苦痛を去り病氣を苦にせざる様になる效力があります。

前段にては病氣によりて癒る病氣と癒らぬ病氣とを述べたが、病氣は同一にても病人の性質によりて癒つたり又は癒らぬ場合あることを最もよく記憶すべきである。

術者は精神療法を受け度きとて來りし病人に向ひ、先づ注意すべきは、病人の心理状態、信仰状態をよく觀察して左の如き心を持ち居ると、病氣は癒らぬことある次第をよく話し、左記の諸項を詳細に説明し、納得させて後に施術するとよい。

- (一) 不徹底な理論を併べて精神が統一せざる者。
- (二) 術者に對し疑ひの念を挟み、氣障な質問をなす者。
- (三) 感應悪くして、効少きときは、患者自身の至誠乏しきによるのであると自ら

受術無効となる心理状態



覺せざる者。

(四) 全く全快する迄、何十回でも受術することを誓はぬ者。  
 以上の如き患者は、受術しても効果が擧がらぬ事が多い、さう云ふ考へがあつたら其考へを除きなさいと話し、納得したらば、初めて施術するがよい。  
 精神療法にては、患者の病氣の種類、輕重よりは、主として患者の精神状態の如何によりて、効果が擧がったり又は擧がらずして終ることがある、この事實をよく含味すべきである。

### 第五章 催眠術療法診察法

精神療法は何れの種類を問はず診察法は簡短で事足りります。即ち第一に問診法を行ひます。被術者からいろ／＼治療上参考となるべきことを聞いて、一々診療簿に記入し、癒るか癒らぬか、癒るとすればどう云ふ手段を採つたら宜いかを定めます。催眠術療法にては主として精神上にどう云ふ障害があるかを診断することが、肝要である。藥物療法の診断法は、精神病

催眠術療法に如く、何なる變態に於て、來たる居るに必要が診察する

氏名、住所、職業、年齢、發病の年月日、經過、原因、嗜好品、既往症、便通、睡眠等を問診する

科は兎に角其他では、餘り精神と云ふ方面に重きを置かぬ、藥物療法では詰り解剖上生理上にどう云ふ變化が來て居るかに就て診断致します。催眠術療法の診断でも無論解剖上生理上如何に變化を來たして居るかに就て診ますけれども、それは從にして主として精神上に如何なる變態を來たして居るかを調べ、精神上的變態を正態に復し、其に依つて以て肉體上に變化を及ぼさしむるのが催眠術療法の根柢であります。問診の事項は患者の氏名、住所、職業、年齢、發病の年月日、病氣が起きてより今日迄の經過の有様、病氣の原因は何であるかの心當り、遺傳にあらざるか否や、即ち血族親に病人ありや、病死者あるや、有らば其病名を聞き、現在症との關係を考へ、既往症即ち以前病氣に罹りしことあらば何病に罹りしか其から其人の嗜好品、即ち酒とか煙草とか、辛いものとか、甘いものとか、何が好きであるか、食慾が増進するか、一日に便通が何回あるか、夜はよく眠れるか、夢を見るかどうか、從來如何なる療法をしたか、精神療法をしたことがあるかを尋ね、精神療法をしたと云は、いどう云ふ精神療法をしたか、其の結果如何であつたかを聞いて、前に



やつて効果がなかつた療法とは全く別の療法を行ふことが必要である。又前の精神療法を悪く云ふ患者は今回の療法にて癒し難い患者である、神を信心するか否かを尋ね、信心する者には其信心を助長して平癒を早からしめ、神信心をせぬ者には更に信心をさせる様に、其れから精神の状態を主として診ます、其人の心が悲観して居るか樂觀して居るか、何か誤つたる觀念が固定して病癪となつて居りはせざるかを知らんが爲に種々の質問をして、種々話を交へて、其れを察知するのであります。且脈搏を検し心臓の鼓動を検し、又患部を検し然うして其人の肉體上及び精神上にある異状を觀破し、催眠術療法で癒るか否かを定め、催眠術療法で癒る病人であれば治療の方針を定めるのであります。

## 第六章 催眠術療法を行ふ法

深呼吸と祈禱

催眠術療法を行はんと欲せば先づ術者は必ず催眠せしめ得と確信し、正座して荒く深く呼吸をなし、其呼吸を胸中にて一より五十迄の計算を繰り返

既往の療法無効  
信心の状態を  
聞診する

催眠術療法を  
受けて効なき  
は神罰

施術室と傍觀  
者に對する注  
意

仰臥して手足  
の筋を固めたり  
り緩めたりす

して行ふこと約五分時間而して後神を祈る、曰く「私が、今施術を始め、始めたら施術のことにのみ精神は統一し、必ず催眠せしめ、必ず病氣を治し得る様に」と祈り、確に催眠術療法は成功するとの信念を神に授かり、病人にも亦神を祈らす、曰く「必ず私は催眠し私の病氣は癒ります様に、若し私が施術を受け、催眠もせず治療の効がなかりしときは、神に對して至誠を缺きたる神罰である、と益々恐縮致します、何卒深く催眠し病氣は癒ります様に」と祈らす、斯く術者と病人との祈禱が終り、兩者の信念が確まらば愈々施術に着手するのである。

施術室には成可静かの室を選び、傍觀者は女の被術者には是非一名は要するも、其他は成るべく避くるを可とす、傍觀者をば正座せしめて深呼吸をなさしめ置き、施術中は傍觀者をして猥りに席を離れたり、私語したりすることを堅く禁じ、又催眠術療法を輕視する人には傍觀をば絶対に禁止するを要す、斯くて複式催眠球を手に持ち、次の順序に施術するのである。

一、仰臥固緩 座敷の中央へ夜寝る様に布団を敷き、坊主枕を具へ、而して其



上に被術者を仰臥せしめ、身體を安樂となして、閉目せしめ、術者脈搏を検して後、被術者の両手の筋、兩足の筋を緩めしめる、二三分時間を経て両手を固く握らせ、両手に力を入れしめ、又兩足の先に力を入れて、兩足の筋を固くなさしむ。

心力を強く集注する

二、心力凝集 術者は被術者に向つて、「屹度催眠せしむ」催眠せしめねば止まぬ」と精神力を鞏固に集注する、此鞏固なる集注即ち念力は催眠せしめんとて着手してより終る迄は、決して弛めず、益々強く張り詰むるを要す、其心力をば張り詰め凝り固むるのみならず、其凝り固め張り詰めし念力は發動して術者の手足の運動となり、言語となりて、次項以下の形式を行ふのである、形式を行ふときは、單に手の先にて行ふに非ず、言語を發するとき、唯口先で語るに非ずして、精神力を強く籠めて行ふのである。

撫て下げる

三、撫下 次に被術者の前額部より兩肩を経て、手の先に至り、又腰より足の先に至る迄、數回稍強く撫て下げる。(初めは稍強く撫てるも、着手より十分時間を経した後、は觸れるか觸れざるか位に軽く觸れて撫てるのである。)

眺視法を行ふ

四、眺視 複式催眠球を豫め仰臥し居る被術者の胸上一尺位の處に、天井より吊し置き、被術者に少しく目を開かしめ、極めて細目に其球を眺めさし、其目は今少しにて全く堅く閉づると云ふ極く細目で眺めさするのである、斯くしつゝ、次に述ぶる動呼吸を計算せしむる。

呼吸を深く荒くして其れを算へる

五、動呼吸 動呼吸とは口を結んで鼻より空氣を深く荒く吸入し、下腹部を張らせ、其れを一と算し、鼻より空氣を出しながら下腹部を凹ませ、其れを二と算し、斯くの如くして呼吸を算すること一より五十迄なし、五十に至らば又一より算して繰り返すのである、若し其計算を誤つたときは、更に又一より算し、其計算を正確に算せんと務めしむる、其計算を正確によく算ふると否とは深く催眠すると否との別るゝ處である、其動呼吸をなすこと十五分時間にも及ばず、次の静呼吸に移るのである。

静呼吸をする

六、静呼吸 複式催眠球を細目にて眺め居りたるを全く目を閉ぢさせ、目の上にハンケチを被ひ、「呼吸を静にする、呼吸の音は少しも聞えぬ様に静にする」心はズーツと静まる、尙ズーツと静まる」と繰り返して、言語暗示を



腹部を輕壓す

行ひつゝ、撫下をする。

七、腹部輕壓 次に術者は片手を被術者の下腹部に極く輕く置き、其掌を少しく電氣の感ぜし如くに微動を與へつゝ、催眠すると心力を凝らす、手は極く輕く觸れる程よい、次に被術者の膝頭を左右同時に術者の左右の手にて極く輕く壓し、微弱なる電動の如く微動すること十數回にして、兩足の脛を経て足の指端に至る迄、極く輕く撫て下ぐることに數回、後足端に掌を當て又極く輕き微動を與へる。

顛顫動脈を壓迫する

八、顛顫動脈の壓迫 次に兩顛顫動脈を術者の兩手にて程よく壓迫する。

言語暗示をする

九、言語暗示 術者は前記(六)以下の施術法を行ふ中は、絶えず被術者を催眠に誘導し、尙其催眠を深く誘導する言語暗示を行ふ、即ち『心は靜まる、靜まる、ズーツと靜まる、尙ズーツと靜まる』と繰り返して、即ち『心は靜まる、靜まる、極く輕く撫て下げるのである、すると其暗示の通りに心の靜まつたのが、即ち催眠したのである。』

催眠術療法に要する時間

以上の諸法を着手より終り迄に三十分時間以上五十分時間位初步の中は

小兒を催眠せしむるは容易

行ふ、私の實驗によれば此法によれば催眠せざるものは百人中一名もなかつた、只其催眠は人によりて深淺を免れない、或は極めて淺きものもあつたけれども、大抵は豫想通り深い程度に催眠した、熟練すると前記の法一二を二三分間行ふと、深く催眠せしむることが出来る。

以上は大人を催眠せしむる法である、小兒を催眠せしむる催眠法は至つて簡單である、即ち小兒を仰臥せしめ置き、而して術者複式催眠球を右手に持ち、小兒の目より四五分位離れし所に球を近づけ靜止して一寸見詰めさし、尙其球を左右に微動せしむると被術者の注意、悉く其球に集まりて稍々瞳孔が放大する、其時其球を徐々に目より遠ざけ、又近づけ、或は球を極めて靜かに一寸位上げ、又一寸位下げ、或は球を直徑二寸位の圓形に廻すと小兒の瞳孔は球に伴ふて動くものである、斯くして球を目の中央の位置に支へ、徐徐と球を下げると眼は段々細くなり、今少しにて全く閉ぢんとする處に至つて球を一寸靜止し、機熟さは『目を閉ぢて眠る』と言語暗示をして全く閉目せしめ、術者の指にて兩眼の上を輕く撫でる、然して術者の兩手にて前



初學者に適當の被術者

催眠程度を見る法

催眠術療法暗示法

額より手の先に至るまで軽く撫て下げつ、「尙深く眠る」「尙グーッと深く眠る」と暗示すると、其通りになる。

此書を読み初めて催眠術療法を實驗せんとする時は、健康の十二三歳の小兒を被術者とするに限る。健康の十二三歳の小兒、五六名に就て催眠法が成功した後に、催眠術療法をよく信じて居る小兒の病氣を癒し次に大人の病人を治療するのが順序である。此順序を誤ると不成功に終る事があります。術者病人に對して催眠法を行ひ初めてより三十分時間も経過すると大概催眠す、催眠せしと思は、病人の手を採り擧げて置く、と其儘に擧つて居る「擧つて居る手は下がる」と言語にて繰り返して行く、と暗示すれば下る、然うなれば催眠が淺くして催眠中の事をよく知つて居り、少しも眠つた様でなくとも、治療の効は充分にある、深い催眠状態になると、催眠中の事を覺醒後少しも知らぬ様になります、深い催眠状態になると、催眠者の手足でも精神でも術者の言ふ通りになります。病人が催眠したら、兼て診察して置いた病氣を治療するのである、例へば頭痛のする患者なれば、頭痛のする局部を術者の手で軽く撫てつ、「頭痛は取れた」と數回言語にて暗示するのである、腹痛のする病人なれば、腹痛のする處を軽く撫てつ、「腹は痛まぬ」と繰り返して暗示するのである、總ての病氣につき、此の例に依りて暗示すると、其暗示の通りに癒る、暗示の方法は暗示術療法を参照して行ふとよい、治療の暗示が濟んだら覺醒法を施すのである。

覺醒法としては、足の先より次第に頭部に向つて撫て上げつ、「足の先より段々目が醒める」と言語暗示をすること數回「目を開いて見ると心身爽快になつて居る」と言語にて暗示すると其通りになります。

### 第七章 催眠術療法受術者修養法

凡そ如何なる療法にても、攝生法をよく遵守すると否とは全癒の上に大關係がある、殊に精神療法に於ては最も修養が必要である、故に講述者は左記の通り印刷し置き、之をよく遵守すると早く癒るからよく遵守して下さい

修養法の要目

催眠術療法覺醒法



と云ふ一枚宛受術者に與へます。

修養法

- 一、何時でも暇さへあれば數息觀（呼吸を荒く深く早くして其れを心中にて一より五十迄繰り返して數へる）をなし心を清らかにして下さい。
- 二、殊に受術待合せ中は最もよく實行して下さい。
- 三、受術に先だち神佛に向ひ心の清らかなを妨ぐる煩悶の原因（若しあらば）を懺悔し心を清らかにして全快を御祈り下さい。
- 四、受術中睡眠した様になつてもならなくても、周囲の音が聞えて居つても聞えなくなつても、雑念が起き居りても起きなくなつても、術さへ受けければ屹度幸福の人となると御確信下さい。
- 五、術を受け御自宅に戻らば直に布団を敷き仰臥し數息觀をなし受術したるときの様にして下さい。其儘一眠すると最も宜しうございます。
- 六、就床時起床時を初めとして時々坐つて瞑目し、數息觀をなし、後合掌して神に全快を御祈り下さい。

- 六、受術の日は朝より夜寝る迄心を平和に清らかに御持ちになり、何人も安心させ、何人をも喜ばしむる様にして下さい。
- 七、朝起きると直に冷水摩擦をなし、庭に出で一吋運動した後、朝飯を喫して下さい。
- 八、受術する日は濃き茶、コーヒー、酒の如き興奮性の飲料を避け、入浴して術者指定の時間に御出で下さい。入浴は都合上受術後にしてもよろしうございます。

- 九、受術を一二回で廢めると不得要領に終ることが有ります。少くとも引續いて三日間一定時間に術を御受け下さい。
- 一〇、此法は一日何回も讀み御實行下さると、屹度受術に依つて快活に愉快な幸福な人となる事を確く保證致します。
- 一一、若し全快しない中に、受術を中止したり、又は他の療法を試み様と思ふ御方は、其旨を紙に記し、術者に示して術者の意見を御聞き下さい。
- 一二、受術中精神がよく統一せずと思ふ御方、受術した効果が不充分と思は



る、御方は自分の心念が未だ淺いからであるか、さなくば天性の然らしむる所であると覺悟し、益々深呼吸と神佛の禮拜とを熱心に行はると理想の域に達します。

此修養法をよく讀み、よく實行して怠らざる人は、如何に病氣は重症でも屹度早く癒ります、然れども、此修養法に反する行爲を取てする病人は、癒ることが手間取れる、又は全然無効に終ることもあります、精神療法を受け此修養法をよく守りて全治せない病人はありませぬ。

尙此修養法に催眠遠隔療法の受術者修養法を參酌して漸し實行せしむると最もよい。

精神療法を受  
け癒らぬ病人  
は修養法を遵  
守せざる故で  
ある

## 第二卷 暗示術療法

### 第一章 暗示術療法とは何ぞや

暗示術療法の  
定義

暗示術の方式

暗示術療法の定義に就ては色々の説があるが私の考では、術者の觀念即ち病氣は癒り健康になつたとの觀念が其儘患者の觀念となつて、患者の精神又は肉體が其觀念の通りになる之を暗示術療法と云ふ、例へば術者が頭痛のする患者に向つて『頭は爽快になつた』『頭痛は取れた』と言語にて暗示すると患者は其暗示の通りに『頭は爽快になり痛みは取れる』これ暗示に感應した、即暗示術療法が行はれたのである、精神療法は何れの種類にても此暗示術療法が大概原則になつて居る。

暗示術療法の方式は言語の外、觸手、手眞似、念力、手紙、電話等何れにても術者の觀念を患者に通ずる方法であればよい、けれども言語暗示が簡便で効果が多し故、普通には言語暗示を多く用ひます。



### 第二章 暗示療法練習法

暗示療法上の四大條件

- 一、暗示は簡單明瞭なる事。
  - 二、暗示には心力を籠むる事。
  - 三、暗示の言語の高低に注意する事。
  - 四、暗示は患者の感受性と一致する事。
- 第一に暗示する事は簡單明瞭でなければならぬ、複雑して明瞭を缺いて居ると、感應が判然せない、即ち暗示療法法の効果が少い、又は全く無効に終る事もある、故に内容は複雑して居つても歸納し約言して簡明に與ふるとよい。
- 第二に暗示をする時には、下腹部に精神力を籠め精神を統一して無我の状態となりて、莊嚴に與ふるを要する、心力を籠めず只輕忽に與へたのではよく感應しない。

簡單明瞭の言語

心力を籠めし言語

高聲語と低聲語

被術者の信仰と治療の關係

**第三** 暗示術に使ふ聲は、高い聲で云つたり、低い聲で云つたりする必要がある、患者が一人のみなれば大きい聲で云つても差支へないが、一室にて數名の患者を一度に施術する場合には、低い聲で暗示をなし、甲の患者に暗示する事は、乙の患者に聽こえず、感應しない様にする、併し今覺醒せしめんとする際と、覺醒せしめたばかりのときには、大きい聲で暗示をするのがよい、聲は幾ら大きくても、心力が籠つて居なければ、其暗示はよく感應しない、それに反して、假令蚊の啼くやうな小さい聲でも、心力が籠つて居れば、其暗示はよく感應する、故に心力を凝めることが最も主點である。

**第四** 暗示の程度は患者の暗示感受性の程度と一致せなければ、治療の効果を奏さない、例へば「頭は爽快になつた」と暗示した場合に、患者の精神にて成る程「頭は爽快になつた」と暗示の通りに思ふ、さう思へば、思ふた通りに頭は爽快になるのである、然るに「頭は爽快になつた」と暗示した場合に、患者が心中にて「頭は爽快にならない」と思ふ、さう云ふ風に、患者の精神で術者の暗示を信仰しなければ、其暗示は効果が無い、時には全く無効となることも



信仰を高める方法

棒寄術の練習

ある故に術者が暗示をするときには、患者は暗示の通りに思ひたり、成つたりする状態でなければならぬ、即ち術者を信仰して居らなければ充分の効果が擧がらぬ、其信仰を高め、精神を統一さす爲に神を禮拜したり、莊嚴の態度をしたりするのである、暗示術療法の成功不成功は、實に此の患者の信仰を得ると否とにある、患者をして治療を受ければ屹度癒ると確く信仰せしむる事に妙を得て居る人程、施術に熟達せし人である。

前述の四箇條をよく含味して、暗示術を練習し置く必要がある、其練習として棒寄術を普通に行ふ、即ち健全體の人に長さ五尺位の二本の棒を、身體の兩側に水平にして軽く持たしめ置き、術者其前に直立し姿勢を正して『其棒は寄る』と言語暗示を繰返し、繰返して與ふると其棒は寄る、此棒寄術を數十回行ひ、暗示術を練習し多人數の前にも、少しも臆することなく、暗示術を活潑に莊嚴に臨機應變に與へ得る様修養し、而して後に治療に着手するものが順序である。

### 第三章 暗示術療法を行ふ法

暗示術療法を行ふて病人を治療するには、病人をして術者の治療を受ければ屹度癒るとの信仰を起させ置き、其病氣が癒る暗示をするのである、其暗示は如何にして與へるか、豫め診察（催眠術療法参照）して病氣の原因症候等を明かにして置き、其れに依つて以て、暗示術療法の方針を定め、次の順序によつて三段に暗示を行ふのである。

病氣の原因を除く法

第一に病癆の原因を除去する暗示をする、頭痛がする病人なれば、其頭痛の原因は何であるかを確め、其原因を除去する暗示をする、頭痛の原因は生殖器が悪くて起つたか、或は煩悶した爲に起つたのであるか等の原因を確め置き、生殖器病から来て居れば『生殖器は健全になつた』と暗示を與へる、煩悶から来て居れば『もう何事も安心して何事も心配せぬ』と暗示を與へる、而して原因が除去せらるれば、其餘波たる頭痛は直ちに消えて仕舞ふ。

第二には現在症を癒す暗示をする、現に頭痛がして居れば『頭痛は癒つた』

現在症治療の法



『頭は爽快になつた』と暗示をする。

第三には攝生法をよく遵守する暗示をする、頭痛のする病人なれば『何事も安心して心を平和に持ち頭を過度に使はぬ適當の運動をなし深呼吸をして神佛を禮拜する』と云ふ風に其病氣に對して必要な攝生法を遵守する暗示をする、攝生法は唯話ただけでは確に守る患者は少いが暗示をすれば知らず識らず其攝生法をよく遵守する、然れば早く病氣が癒り又癒りし病氣は再發せないのである。

治療の暗示は以上の三段に行ふのを原則とし、其中の一段の一症候を治療せんが爲に行ふ暗示に種々の形式がある、例へば爰に頭痛に悩む患者ありと假定し、其頭痛を治療する暗示を其形式によりて區別すると左の如くである。

心力暗示

第一は心力暗示法術者が精神力を統一して宇宙靈と合した状態になり『頭痛は取れた』『頭は爽快になつた』と強く觀念する、其觀念は病人が健康體になつたことを、心像にありありと見ゆる程度までにする、其術者の觀念が

口頭暗示法

偉大の力となりて、病人の精神に感應して術者の觀念通りに癒るのである。第二は口頭暗示法言語を以て『頭痛は取れた、頭は爽快になつた、何事も氣にかゝらぬ何事も安心する』と口頭で暗示をする方法である、然ると其暗示通りに感應して癒るのである。

合圖暗示法

第三は合圖暗示法之は『一、二、三、それ頭痛は取れた、頭は爽快になつた』と暗示をする、或は五回私に君の頭を撫でると頭痛が取れて頭は爽快になると暗示して置いて『一、二、三、四、五、それ頭痛はとれた頭は爽快になつた』と云ふやうに暗示をする。

氣合暗示法

第四は氣合暗示法之は『私が今エイツと氣合をかけると、君の頭痛は取れて頭は爽快になる』と暗示して置き、下腹部から心力を凝めて熱烈に『エイツ』と大喝一聲すると頭痛は取れ頭は爽快になる。

觸手暗示法

第五觸手暗示法之は術者の掌に精神力を凝めて、痛む局部を直狀若くは輪狀に軽く撫でる、手掌に代へて一名パーキンス又は催眠治療具と云ふ、金屬性小軍扇形の具を以て局部に當て心力を凝めて輕撫すると最もよい。



第六は指先暗示法術者の右手の人指と中指との二指を伸ばし、他の三指を堅く握り、其伸ばせる二指の先に力を凝め、患部に近づけ一二寸距て置き、術者精神を統一して、其指先より患部に癒す心力を傳へんと熱烈に觀念する、然ると患部は治するものである。

第七は舉動暗示法は患部に充血して居るのであれば、其充血を解く舉動を手の先になしつゝ、充血は取れると強く觀念するのである、其他患部によりて種々の舉動を患部に觸れずになして治する法である。

第八は神力暗示法は『私』が今神様を祈る、さうすると君の病氣は直ちに全癒する』と暗示して置き、

吐普加身依身多女坎良震巽離坤兌乾波羅伊玉意喜餘目出玉

(三種の大祓)

又は

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴  
從身語意之所生 一切我今皆懺悔

(先懺悔文)

之を三遍唱ふ、然ると其暗示の通りに全快する。  
此三種の大祓先懺悔文に代ゆるに、患者の信仰せる神を祈るは最もよい、即ち患者が基督信者なればアーメン、日蓮宗信者なれば南無妙法蓮華經を唱ふるのである。

以上の暗示術療法を實地に應用せば、不思議に重病も根治する、彼の小兒が手足を痛めし場合に、其父又は母が其痛む所を撫で、『もう癒つた』と云へば小兒は痛みを忘れて健全となる、之れは即ち暗示術療法を行ふたのである、此理を體して應用せられれば必ず大效を擧げ得ます。

暗示術療法では患者が普通の状態にある時に、暗示術療法を行ふのである、故に患者中物足らぬ感がして感應しない病人がある、即ち治療の效が見えぬ病人がある、斯る暗示術療法の效なき病人に對しても、催眠術を行ふに催眠せしめ置き、而して後に治療の暗示をすればよく感應する、催眠者に向ひ水を『麥酒である』と暗示し飲ますれば、水が麥酒に飲める、然う言ふ作用を



以て居て初めて偉大の効果が擧がるのである。然れども病人を催眠せしむることは至難の業である。催眠法を行ふも催眠せしむる丈の技術に乏しい術者が實は催眠術を行ふて居るのであるが、催眠せざるもの多き故、此法は催眠術療法ではない、暗示術療法である。云つて居るものがある、之れは賢いやり方であるが、催眠術療法を知つたものより見れば、催眠術の一部分を行ふて居るものであることを直ちに看破することが出来る、併し病人が術者の言を信じて、今受けた法は催眠術療法ではない、暗示術療法を行ふて貰ふたのである、之れで己の病氣は癒ると確く信ずれば信じたる通りに病氣は癒る、精神療法の原則は總てが殆んど暗示術療法である故に、何れの精神療法を行ふ場合にも、暗示術療法は應用せらるゝを以て、最もよく修得練習し置く必要がある、此療法をよく練習修得し置けば、其他の精神療法を修得するのは容易である。

### 第三卷 プラナ療法

#### 第一章 プラナ療法とは何ぞや

プラナとは印度哲學上の言葉で、生力或は靈氣とでも譯すべく、宇宙萬物の活動の本源をなす所のものである。もとより物質ではなく、一種の精神的存在であるが、宇宙に瀰漫してゐて、或は電氣、熱光の如き力として現はれるが、それよりも一層重要なことは、人間を始めすべての生物は是れによつて生存を續けて居ることである。生物は常に動いてゐる、外見では静止してゐるやうでも、それは絶対の静止ではない。呼吸、血液の循環、消化、吸收、同化等の作用が絶えずその体内では行なはれてゐる。植物の種子の如きですらも、時くと芽を出すのは、何十年でも微ながらに一種の呼吸作用が細胞によつて行なはれ、細胞内は静止してゐないからである。かく生物が不絶の活動を續け、生命を保持してゐるのは、此のプラナをその体内に持つてゐる故である。



プラナは個人  
の生命力で宇  
宙の心意であ  
る

プラナの本體

第三卷 プラナ療法 三六  
吾人は食物、空氣、光線等からプラナを攝取するのである。或人は生物を活動せしむるのは神経の力であると云ふ。神経の力は只神経組織が完全に具はつてゐるだけでは生じない、その證據は人間は死ねば如何に突くも擲くも痛まないが、その神経組織は死の刹那を境として左程急激に變化するものではないにも拘らず、神経を傳達する力がなくなつた、即ちプラナが亡くなつたのであつて、神経の力といふも亦プラナの顯現に外ならぬのである。此のプラナの本體は何者であるかは生命とは何ぞやと云ふに等しく、頗る高遠な純哲學上の問題で、説明に困難である。たゞこれが宇宙の心意とも云ふべきものの發現であつて、恰も電氣のごとく其物だけを取り出して見るとも觸るゝ事も出来ないけれど、その作用と活動とを實驗することが出来るので、これによりプラナの法則を研究し、これを利用して諸々の疾患を治癒するのが即ちプラナ療法である。

## 第二章 プラナ療法の原理

病氣はプラナの不足

プラナの傳送

人間はその食する所の食物、飲む所の水、呼吸する所の空氣などから常にプラナを吸収して居る。そして是れを腦髓又はその他の神経中樞に蓄積し、身體の各部に必要に応じて供給するのである。人により多少の差あるもプラナを所有しない者はない、その分量は決して一様でない、これ人に強壯病弱の相違ある所以である。また同一人にして、身體の或部分に著しく少いと云ふ事がある、少い所は病氣にかゝつてゐる所である、すべてプラナが豊富でありさへすれば、其處には常に生氣満ちて健康を保つことが出来る、病氣は即ちプラナの不足である。と見るのが此の療法の根據である。人間は適當な方法を講じさへすれば、自身に有するプラナを増加せしめ、且つ是を他人に傳送し、由つて以てその人の病氣を癒すことが出来る、斯く云へば科學的物質觀に囚はれたる人は、自己の體内の或部分に傳送するのは可能であらうけれども、他人の身體に如何にして移送することが出来るかと非難するかも知れないけれども、是れはプラナを一つの物質の如くに考へた誤りであつて、電氣である所のプラナは、敢て一人の體の内外を問は



プラナは宇宙に充滿す

ないのである、それでプラナに由つて他人を治療する者は、自ら四圍の空氣食物等より大にプラナを吸収しては是をその患者に傳送し、自らプラナを吸収し得ない患者の爲に、自分の身を一つの唧筒として、宇宙に充滿するプラナを自分を通じて注ぎ掛けてやるのである、さうすれば患部の細胞はプラナを以て充たされ、その機能を恢復する、従つて其部の器管も平常の調子に復し、身體は健康となる、健康とは身體各部の器管がプラナを充分に有し完全にその機能を遂行する事をいふのである。

プラナを自ら吸収し、これを他人に傳送すること即ちプラナ療法を行ふことは、何人といへども練習と修養によつて實行することが出来る、以下その方法を説明しませう。

### 第三章 プラナ療法を行ふ法

準備事項

プラナ療法を行ふには先づ準備として心得置くべき事項が二三ある。

第一は身體の自然法を辨へ、患者をして能く之を守らしむる事である、身體

身體の自然法

咀嚼、水飲、呼吸、安眠、安心

自信信念

の自然法とは(一)その同化作用を旺にする、即ち消化器を健全ならしむる事で、術者の方から云へば如何なる病氣でも先づ胃腸を健全にして遣らねばならぬ、患者の方から云へば滋養物を咀嚼して食する事である、(二)次に適宜に水分を攝取して體内の疏通を好くすること、(三)呼吸を正しくすること、(四)身體を清潔にし安眠を圖ること、(五)心を寛く持つて天命に安んずることである。

第二に必要なのは自信力で、術者は自ら病人を治療し得る權能を持つてゐる事を確信し、患者はまたプラナの作用に依つて自己の病氣は必ず治療する事を確信しなければならぬ、術者自身の自信を作ること、は修養と練習とによれば比較的容易であるが、多くの患者をしてその確信を得せしむるには、プラナ療法の偉大絶妙なる所以を説明し、且つ豫め確信を増すべき一種の言語暗示を與へると好い、其際術者は極めて熱誠を罩めて猛烈なる確信を以て暗示をしなければならぬ、さて術者のプラナを病人に傳達する方法、即ちプラナ療法を行ふ方法を大別して三つとする。



手傳縦行法と  
パッス

第一は手傳法で、これが最も重要である。なほ細別して左の七種とする。

(一) 手傳縦行法 催眠術に於けるパッス即ち撫下法の變形である。即ち術者の手の指を擴げ、兩手を差出し、患者の頭上三四寸の所に保ち、指端より流出するプラナを以て患者を圍繞する心地にて心力を凝めて、兩手を徐々に患者の顔面をやはり三四寸の間隔にて下げ始め、普通に膝のあたりに止め、恰も水を打ち切る如くに左右に兩手の指を振るのである。次に指を握り、兩手の掌を外側に向け、徐々に二尺の距離を距て、患者の身體の前面を上方に通過せしめ、頭上より腰の邊まで下げ、且患部に對して此の手傳縦行法を最も多く行ふのである。其頭上に至つて再び指を開いて、掌を患者に向けて、また前面を下げるのである。その間術者は指端より絶えずプラナが旺盛に流れ出づることを思念しなければならぬ。術者が手を下方に動かすとき、患者が休息平和の感を起し、上方に動かす時は患者は活氣を鼓舞せらるゝ如く感ずるとよい。そして術者の手を患者の身體より離す距離は、手の運動を急激にする程これを増加して、或は一尺二尺に至る事もある。之を行

撫下は沈靜撫  
上は刺戟

手傳横斷法

ひとつ、ある間は、術者は始終精神を統一して之によりて癒ると強く心力を凝めなければならぬ。

手傳指頭廻轉法

(二) 手傳横斷法 術者の兩掌にて身體又は患部の上三四寸離れて左右に移動せしめつゝ、心力を凝すので、始めは患者の身體の中央より掌を横に左右に外側に向けて行ひ、次に身體の兩側より中央に向けて動かすつゝ、心力を凝すのである。

手傳指頭廻轉法

(三) 手傳指頭廻轉法 術者の指を擴げ、右手だけを患部より五六寸隔りたる所で回轉せしめつゝ、患部は癒ると心力を凝すのである。

手傳穿孔法

(四) 手傳穿孔法 術者の指先を患部より五六寸離れた所で指を捻つて心力を凝めて、恰も孔を穿つが如くする。

手傳按手法

(五) 手傳按手法 心力を強烈にして術者の手を患部に軽く密着して、一二分の後離して、掌と掌とをよく摩擦して再び置く。

手傳輕打法

(六) 手傳輕打法 心力を凝めて右手の指の先を以て軽く患部を打ちつゝ、手を下方に下ぐる、打つときは指の腹を外側にしなければならぬ。此法は充血、



手傳按摩法

した患部にのみ施すのである。  
**(七)手傳按摩法** 普通の按摩の如く力を用ひず心力を凝めて掌と指との腹面で軽く靜かに患者の身體を上部より下部に撫で下ぐる。

以上は手によつてプラナを傳送する法である。病氣の種類と輕重とによりて前項の諸術を一種又は數種行ふのである。

氣吹傳法

**第二は氣吹傳法**で、それは患部に布片の類を覆ひ、それに術者の口をつけて恰も吐き出すプラナを以てその部分を貫かんとする如くに心力を凝めて息氣を吹くのと、患部より二三寸離れた位置から口をつばめて心力を凝めて息氣を吹きかけるとの二種である。

凝視傳法

**第三は凝視傳法**で目に由る法である。是は患者の身體又は患部を凝視しつ

手の摩擦と振動

つ我身よりプラナ傳はりて癒ると心力を凝めるのである。  
以上の各法を行ふてプラナ療法を施すには、先づ手の準備をする。これは兩手を激しく摩擦し、然る後に彼方此方に振動かし、次に幾度も堅く握り合せては、急に開き、斯くしてプラナが兩手に夥しく集つた後に行ふのである。

全身療法と局所療法

これが療法を行ふにも、患部のみに對して行ふよりも、其前に患者の全身に向つて一般的手術を行ふがよい。差當り右手を腹部神經叢(水落)に當て、左手は背部に當て、心力を凝め、全身にプラナを傳達することが必要である。然る後便秘ならば腎臟と下腹部、胃病ならば胃及び腸といふやうに、病患の部分に向つて前段に示した種々の方法中適當と思惟する法を行へば好い。

食欲不振全治の實驗

講述者がプラナ療法を行ひて、意外に大効果を擧げし實例數多の中より、一例を述べませう。三十二歳になる商人、多年胃弱に罹り、食欲不振に苦しみ、種種藥石を試みしも全治せず、百方策盡きしによりプラナ療法を行ひ、呉れて來れり、私は其患者を寢臺に仰臥せしめ、胃部を檢したるに確に胃部に異狀を認めたり、日々攝取する食量を尋ねたるに、米飯を軽く二杯食すると胃部重苦しくて不快に堪へずと、余は瞑目して深呼吸をなし、精神を統一しプラナの働きを盛にして後に、患部に對して手傳縱行法と按手法とを行ひつ、尙言語暗示をなし、終りて後に、施術中の心持を聞き、たれば、何となく良

い心持にて、胃部は清々して胸は空いて來たとて喜び謝して歸れり、翌日其



第三卷 プラナ療法

患者来り御蔭様で、食欲非常に増進し、昨日の夕食は米飯を六杯食して寝たが、今朝起床するや空服を感じた、朝食は八杯食したが未だ何杯でも食へる様だが控へた、食欲も斯く増進しては却て困るから、今日は食欲減退の術を施し、四杯食すれば満腹する様に、して下さい、と、私は今度は氣吹法を行ひ四杯で満腹する暗示をしてやつた、後數日を経て患者より禮状來り、其文の大意に曰く、御靈術で小生の食欲は希望通り三食共米飯四杯宛で満腹致す様相成、日に壯健の度を増し、元氣旺盛意思強固となり、職業に勤勉するも疲勞を知らぬ、様相成り誠に喜ばしい、依つて小生も職業の餘暇に、精神療法を研究し、世間の病人を救ひ、社會の爲に貢献したい、而して先生の御恩に報ゆる一端と致したい云々と見えた。

### 第四卷 靜坐呼吸療法

#### 第一章 靜坐呼吸療法とは何ぞや

呼吸とは一口に言へば、體內の炭酸を吐出して空氣中の酸素を攝取する作用である、此作用を營むには、胸廓と腹腔との境に肺臓の土臺になつて居る横隔膜といふ膜が、腹腔の方へ即ち下の方へ凹む、それに胸廓の周圍に附いてゐる所謂呼吸筋と稱せられる筋肉が、手傳をして胸腔に空處を作る、然るに胸廓は八方塞がりて居り、唯一方口腔氣管より肺臓と云ふ所謂氣道に依つて外界の大氣と通じて居る、外界の空氣は直に胸腔内の空所を填むべく鼻口から侵入して來る、これに依て海綿の如き兩側の肺臓は空氣を孕むて膨脹する、此際肺臓内の血管を循環して居る血液、詳しく言へばその血液中の赤血球は自分の携へて居る炭酸を空氣中に放ち、其代りに空氣中の酸素を取つてこれを全身の組織に與へる、次いで横隔膜が舉り胸廓が狭り、肺臓



死呼吸作用と生

が縮むと同時に血液に酸素を與へて炭酸を受取つた、肺臓内の空氣が外へ  
 追出される、これが即ち呼吸である、此呼吸と呼吸とを交互に營む働きを呼  
 吸作用と云ふ、俗に『いきをつく』『いきをする』等と云ふ、此『いき』は生の意  
 味で或は生吹の意であるとも云はれる、兎に角生死に關係のある辭で直接  
 是れが生命に關して居ることを表して居る、されば『いきが止つた』とか『い  
 きの根を斷つ』とか云ふ語を以て人の死を言ひ表はして居る、實際呼吸が  
 止めば必ず死ぬ、死ねば呼吸作用が行はれない、即ち『いき』が無いのは死の  
 一徴候である。

呼吸法の眼目

斯様に大切な呼吸を靜かに正しく坐して行ひ病氣を癒す法を靜坐呼吸療法  
 法と云ふ、靜坐呼吸療法には二木博士の腹式呼吸法、岡田氏の呼吸靜坐法、藤  
 田氏の息心調和法、小山田學士の深呼吸法、ベークマン氏の強肺術等種々あ  
 る、其行ふ方法は人により全然相反する點がある、然れども歸する所の原理  
 は一である、其目的も亦同一である、人の呼吸は多くは不知不識の間に間違  
 つた不自然のものとなつてゐる、之を自然に復して完全なるものとなし、又

姿勢

之によりて雜念妄想を退治し、観念力又は確信力を強め、偉大の精神力を發  
 揮せしめ病氣を癒し、健康を増進し、又は精神療法家としての精神力を養成  
 するのが此法の眼目である、呼吸療法中最も廣く行はれて居る藤田式と岡  
 田式の二方法の大要を紹介し次に講述者の方式を述べませう。

第二章 藤田式靜坐呼吸療法

藤田式靜坐呼吸療法は坐布團の上に坐しても椅子に腰を掛けても宜いが、  
 靜坐の姿勢に就きては左の條項を必ず守らねばならぬ。

(イ) 背骨を眞直にして下腹を前へ張り出し、臍の上部から心窩へかけては  
 必ず力を入れぬ様にし、臍の上部を少しく折り、其所を凹ます様にする。

(ロ) 頭は眞直に鼻と臍とが一直線に當るやうにし、肩は垂れて怒ることな  
 く、手は引寄せて身に近附け、兩の掌は膝の上に載せて組合せ、眼は軽く閉  
 ぢて腹の中を観る心地にする。

右の姿勢が出来ると初心の人は、動呼吸から始めるのが遣り易い、其は始め

動呼吸



呼氣の仕方

吸氣の仕方

に鳥渡息を吸入して下腹部を張り出し、そこでウンと下腹部に氣力を充たすと共に、鼻からソツと極めて軽く少し宛息を洩らすのである。そして堪へて居る時間は丁度自分に適當した程度に止め、決して無理に堪へ過ごしては成らぬ。

さて呼氣の方法は先づ鼻からそろ／＼と線香の煙の出るやうに息を吐き出すのであるが、最初は先づ下腹を張り出す心地になつて、其儘持續し、鼻から靜かに息を吐き出す、さうすると下腹は追々凹んで遂に下腹部は背部に附着する程にまで凹む。是で完全なる呼氣が出来たのである。

次に吸氣に移る。其はまづ鼻から靜かに空氣を吸入し、下腹部は次第に前へ膨れ出る様にする。腹一杯に膨れ出た時ウンと一段下腹部に氣力を充たすやうにして、次の呼氣に移るのである。前の呼氣と此吸氣とを合して之を一呼吸と云ふ。吸氣の時間は呼氣の時の約三分の一位の時間でよく、また肋膜や肺の病氣のない人は、吸氣に際して始めに肋骨を靜かに少しく上へ揚げ、そして又横へも少しく擴げるやうの心地になつて行ふとよい。

行ふ時間 靜呼吸

右の呼吸を繰り返して、卅分なり一時間なり任意に繼續するのである。或る適宜の時間を経過したならば、今度は靜呼吸に移る。夫は下腹部に力を入れ、臍部以上にも亦以下にも少しも氣の滞りなき様にし、細く長く靜かに幽なる自然の儘の呼吸をする。下腹は唯張つた儘で膨らしたり凹めたりせず、居る。此呼吸の時間も任意でよい。以上は藤田式の骨子を一言したに過ぎない。

第三章 岡田式靜坐呼吸療法

岡田式靜坐呼吸療法は、靜坐法と呼吸法の二に大別することを得る。

第一 靜坐法

一、先づ姿勢を正しく坐る。

イ、膝を廣く開くべからず、然らども窮屈に不自然に締め合すにあらず、股の附け根と兩膝の距離と同じき様に上脚を併行させる。

ロ、足裏は尻の下に重ね合はす。此時左足裏を下に右足裏を上にして相交するまで重ねべし、兩方に廣く開きて尻を其間に落してはならぬ。

靜坐法と呼吸法は異なる

靜坐の十二條



無我無心は自然の結果

- ハ、上半身を眞直にして尻を兩踵の上に乗せ、脊髓を中心として首を正しく安んずる。
- ニ、上半身の据方は腹を前へ突き出し、臀部を後へ突き出す、氣持にして膝を短くするやうにする。
- 三、兩手は膝上に於て右手四指の上に左手四指を乗せ、更に其上に兩拇指を軽く組み、股の附根に置く。
- 四、眼を軽く閉ちて呼吸を定むる。
- 五、靜坐中の呼吸は普通でよい、呼吸法の呼吸をなすのではない。
- 六、下腹部即ち丹田に力を籠め、體は軽く頭を休める。
- 七、唯ぼんやりとして浮草の如くせよ、大空にぶら下りたるが如き心持にて、絶對に自力を用ひず、努力を用ひずにする。
- 八、無念無想にならうなどと求むるなかれ、求むる心それ自身が既に意識を働かするのである、無我無心は靜坐修練の自然の結果たる理想である。
- 九、健康を得たしなど求むる勿れ、又此病氣を癒さうなど、希ふてもいかぬ靜

坐が第一の目的で第二第三の目的も亦靜坐と心得よ、靜坐は手段と目的の全體である、健康なり病氣治療なりは、只之れに附隨して來るもののみ思ふべきである。

一〇、少くとも二三十分乃至一時間之をなせ、長き程効果は多い。

一一、靜坐して精神統一して來ると、身體が前後左右に動き出すことがある、其動き方は人によりて異なるが、多くは循環的である、而して心裡明瞭大虛と共に相通ずるの愉快を感じ來る、然れ共更に動くことなくして此處に至る人もある。

一二、此法、衆と共に出来、又單獨にても無論出来る。

### 第二 呼吸法

- 一、靜坐法を前項の法によりて行ひ。
- 二、軽く目を閉ちて呼吸を定むる。
- 三、先づ吸の息より始む。
- イ、吸呼共に鼻よりする。

呼吸の條件



口、吸の息は太く短く即ち早く爲す。  
ハ、吸ふ時は胸は膨れ下腹は凹む、されど意識して殊更に凹ましむるにあらず、自然に凹ますなり。

四、然る後呼の息に移る。

イ、呼も亦鼻よりする。

ロ、息を呼く時はぐつと腹即ち臍下に力を入れつつ、極めて徐々に緩く細く長く呼く。

ハ、此時殊に注意して胸を堅くしてはならぬ、胸を緩め柔げ、鳩尾下を弛め落す氣味にする、初心の間はいやに胸を張りて腹と胸と同時に固くする嫌ひありては寧ろ害ありて益がない、熟練すれば、腹に力を入るれば入る程鳩尾下凹み、胸も緩みて益々柔かになるものである。

五、呼吸は恰も唧筒の如くで吸即ち水を吸ひ上ぐる時はぐつと一度に勢よく入れ、呼即ち水を出す時は細く長くするのがよい、一呼吸で兩國橋を渡るほどになるとよい。

鳩尾下を凹めと反つて害がある

六、如何なる時にも機會あらば之を行へ、必ずしも正座の時に限らず、椅子に凭り又は電車汽車に乗り居る場合も正座の態度にて此呼吸をせよ。

七、行住座臥斷えず下腹に力を込めよ。

以上は岡田式の大意の骨子を一言したのに過ぎない、岡田式と藤田式とは其行ふ方法中全然相反する所あるも、其原理は歸する所同一である、故に靜坐呼吸療法は藤田式によりても、岡田式によりても何れにても適當に行はばよい、修養法健康法將又治療法である。

### 第四章 古屋式靜坐呼吸療法

講述者が常に行ふ靜坐呼吸療法は極めて簡短で短時間で事足る、普通五分時間にて充分である、靜坐法は坐布團の上に坐しても椅子に腰を掛け居りてもよいが、臍と鼻と相對し、耳と肩と相對して首と胴とを眞直にして正しく坐して腹部に力を入れ、兩手は合掌して居る、呼吸は荒靜の二に別れて行ふ、初めは荒呼吸即ち極めて深く荒く早くしつゝ、其呼吸を心中にて一より

荒呼吸と靜呼吸



り五十迄計算す、五十に至らば又一に戻りて算ふること四回、即ち二百回行ふ、然らば今度は靜呼吸と云うて極く靜かにする、呼吸の音が少しも聞えず、鼻孔に小さき羽毛を置くも動かぬ程に、靜かに呼吸をして居ること一二分時間、而して後に神佛を祈るのである、即ち雜念の發生は止まりて精神は統一しますやうに、心清かとなり、健康な愉快な快活な人となりますやうに、神佛に祈るのである、其の時に尙ほ自分の缺點が癒るやうに祈るのである、若し頭痛があらば頭痛が癒ります様に祈り、心配せよよいことを心配する癖、あらば何事も安心して愉快の人となります様に祈るのである、此靜坐呼吸療法は就床時と起床時とに最もよく行ひ、其他は休息時に行ふとよい、此法は時間が僅か五分時間で充分であるから、多忙の人にはよい法である、此靜坐呼吸法は雜念を拂ひ、腦神經を休めることが主になつて居る、雜念が拂はれ、腦神經が休まれば精神は統一し、心身は健康となり、能率は増進せられます。

古風式の效果

講述者は心身が疲勞したときは、直に四五分時間此靜坐呼吸療法を行つて

深呼吸に禁忌の病氣

恢復するを常としてゐる、講述者は一日の日課として、郵書の返事を大凡三十通出し、新刊書を菊判にて二百頁を読み、原稿を菊判にて五百頁以上書く、其外患者を治療し、通學生に學科の講義をなし、尙公私の事業の爲に奔走する暇も多大である、其れで健康を保つてゐる。

五十歳に近き身でありながら、體量も二十貫ある之は、此靜坐呼吸療法の効果が與つて力ありと思ふ、呼吸につき禁忌の病氣がある、即ち深呼吸をすると却て悪くなる病氣がある、急性の病氣、出血する病氣、脱腸の病人、熱のある病人には、深呼吸は却つて害になる、併し少し位の鼻加答兒は、深呼吸によりて癒つて仕舞ふ。

氣管支加兒答濕疹が癒つた

次に呼吸法で名高い二木博士と岸本教授の實驗談を紹介しませう。

二木博士は生來非常に虚弱であつた、子供の時から終日頭が痛く、目は極く弱く、耳も鼻も齒も一つとして完全でない、加ふるに慢性の氣管支加兒答、胃腸病、皮膚全體の濕疹、まるで病氣の間屋であつた、高等學校時代には強度の神經衰弱症に罹つて、落第までした、併し博士は内外の諸書を涉獵して、此の



胃腸病中耳炎  
神經衰弱が癒  
つた

呼吸療法を發見し、熱心に是を實行する事に依つて其數々の病氣を擊退して日本に名高い醫學博士となつた。  
早稻田大學教授岸本能武太氏は青年時代から激烈な胃腸病を患ひて、之が慢性となり、更に病勢を強め、加ふるに中耳炎を併發して三年間病床の人となり、激しい頭痛に悩まされ、耳も鼻も咽喉も悪くして神經衰弱を誘發した爲に有ゆる療法を試みた揚句、偶呼吸療法を實行し始めると、半年にして腸胃の疾患を忘れ、慢性中耳炎其他の諸症も之に伴つて快癒し、三年にして無病息災の人となつた。

靜坐呼吸療法  
の生理的効果

其他呼吸法に依つて治療に赴いた實例は極めて多く殆ど萬病に效果ありと云つて可い、癒りし實例は之にて止め、靜坐呼吸療法の效ある原理を一言しませう、生理的には血行に及ぼす重要な好影響として(イ)血液の清淨機能を充分ならしめ(ロ)血液の循環を助け(ハ)血管壁の強力性を保存せしむる此三箇條である、是に依つて身體各部に於ける新陳代謝の老廢物は速に除きさらされ、病的變化は之を防止して新生物の發生を促し、血管硬化等

心理的効果

の老衰の現象を起さぬ様にするのである、心理的には聯想作用を止めて精神力を蓄積する效がある、之を常に行ひ精神力を蓄積し置き、必要の場合に當りて電光石火捲土重來の勢を以て、精神を活躍せしめ偉大の事業を成し遂げるのである、其れには日頃忍耐して之を實行し永續して廢めてはならぬ、二木博士岸本教授之により偉大の効果を擧げしは、皆二年三年の久しき間一日も缺かさずに之を續行して、初めて顯はれたのである、故に永く實行せなければ效は擧げられぬ。

尙重複を願はず、靜坐呼吸療法の效ある理由を述べませう。  
腹で息をすれば、全身の臟器を健康にする、殊に肺に空氣がよく這入て肺が健全になる、心臟が健康になる、胃腸の働きがよくなつて、食慾が増進する、血の巡りが血管の末迄よく届くから、腦を健康にし、手足の筋肉と皮膚とを壯健にする、其他身體の諸機能總てに對して皆效果がある、腹の力と腹の息とは腹にある神經に傳はつて、全身の神經及び腦脊髓等の働きを盛んにする效がある、實に腹の力と腹の息とは、生命の本であり、唯一の健康法である、



従つて脚氣をも治療し得るのである。  
 心理的の效果は、精神力の浪費を省く事、精神を轉換せしむる事、精神を統一せしむる事の利がある、何事をなすにも精神を統一して、全精神を其事にのみ集めて働かすると、必ず大なる事を成し得る、又之により悲觀の精神を換へて樂觀にすることが出来る、考へてもよい事を考へたり、心配せてもよい事を心配したりして、精神を疲らし爲に、一世一代の大業を成さんとするに當りて、思ふ事が言へず、意の如くに肉體働かず、意外の大失敗を招き後悔することがある、然るに靜坐呼吸を常に行ひ、修養を積み置くと、心は常に明鏡の如く清らかに、精神力は旺盛にして、臨機應變の所置に富み、快活に愉快に大業を成し遂げ得る。

靜坐と成業

### 第五卷 自己催眠療法

#### 第一章 自己催眠療法とは何ぞや

精神自療法  
病氣の癒る根

自己催眠と坐  
靜と靜坐

精神自療法の根柢は自分で自分の病氣は癒る癒つたと強く心に思ふ、其確信が強ければ、其確信通りに細胞は活動し血液も筋肉も病氣を癒し得る様に活動して、而して癒るのである、之は心にて漬梅を食ふたと思ふと唾液が出る、美しい異性を思ふと、快感が起ると同じ道理である、併し普通にては、現に病氣に苦しみ居りては、癒る又は癒つたと思はふとしても、さう思へぬ、故に種々の手段を盡して、癒る癒つたと云ふ觀念を起し、其の觀念を益々強める方法が即ち、精神自療法である、此自療法に種々あるも、其中最も學術的であつて、效果の顯著なるは自己催眠療法である。  
 自己催眠療法は自分で自分を催眠せしめ、自分の病氣を癒す方法である、自己催眠療法にて自分の病氣が癒り、自分の惡癖が矯正さるゝことを世人が



認めし結果、近來自己催眠療法の研究が非常に流行して來た、精神修養法として、座禪を行ふも定に入ることは非常に困難であるが、自己催眠療法によれば、直ぐ妄念の發生を留めて禪定と同様の状態を得らる、依て自己催眠療法は俗間に行はるゝ静座法に比し、其効果は非常に大である、自己催眠療法にては修養次第、彼の千里眼さへ行ひ得る力あるを以て見ても知るべきである。

## 第二章 自己催眠療法豫備修養法

自己催眠療法を行ふには、先づ豫め以下に述べる六個の準備條件を修養し置く必要がある。

第一には男子なれば、先づ理髮所に行き、理髮し、女子なれば髪を洗ひて髪を結び、入浴し爪を切り、薩張した衣服に着代へ、五六町乃至一里位の所にある神社又は佛閣(何れの神佛を問はず)に參詣し、平癒を祈る、因に云ふ神佛を祈る氣になれぬと云ふ人は、自分で自分の思想の不健全を知らずに居る人で

ある、さう云ふ人は、何日か必ず終生忘ることの出來ぬ煩悶に陥ることがある、故に何人にも神佛を祈願し心の曇りを除くことに勉むべきである。  
第二には、静かな室に成るべく自分獨りのみ居り、正座して下腹部に力を凝めて、深呼吸をなし、吸氣のとき下腹を膨まし、呼氣のとき下腹を窪ます、其呼吸を心にて一より五十迄計算することを四遍行ふ、之を行ふに二分時間に足りる、深呼吸中は其呼吸のことにのみ精神を集め、他の事を思はぬ様にし、其計算を誤らぬ様に注意するとよい、忙しき人は休息中又は船車中に行ふもよい。

第三には、静かの室に成るべく自分獨りのみ居り、正座して神(佛)様にてても可様に向ひ、私(わたくし)は神様の御前に罪を犯し、其れが爲めに病人となりました、どうか此愚なる私を御救ひ下さいと祈るのである、病氣の起りし原因をよく尋ねて見ると、己が自然の天理に背いたこと、即ち神の御前に罪を犯したことがある、それが原因となつて居る、其罪を神様が御責めになるのである、と悟り、我罪の恐ろしきを悟つて後悔し、且神様に向ひ、心の中で自分が犯し



た罪の數々を悉く懺悔し、自白しどうぞ神様私の罪を許し元の健全な身體にして下されと默禱すること五分時間之は朝夕を始めとして閑暇ある毎に行ふ。

第四には静室に獨りにて居り直立し又は正座して左手にて左側の帯を握り下腹部に力を籠め右手を握りて固き拳を作り振り擧げ、私は心の邪を去りて心を清らかにする故に精神はよく統一する、屹度自己催眠療法は成功する若し自己催眠療法が成功せざるときは恥しい、私は清い精神になつたから屹度自己催眠療法は成功すると強く下腹に練り込みつゝ、振り擧げし拳握を下に打落すこと吾が年齢の數ほどなす。

第五には夜寝るときのごとく静室に布團を敷き自分獨りのみ居り其上に仰臥して兩手を兩側に垂れ兩足を伸し身體を安樂にし、而して後兩手を固く握る、兩足に力を入るゝ手を益々強く握る、兩足に益々力を入れる、其儘十分時間を過ぎて後兩手の筋を緩め、兩足の筋を弛め、大に弛める、而して大凡二十分間其儘で居る。

第六には前段の如く布團の上に仰臥し心を鎮めて呼吸を静かにし、呼吸の音は少しも聞えぬ様に静かにし、心はズーツと鎮まる、尙ズーツと静まると心の中で繰返して堅く觀念する、之は着手より終りまで、大凡三十分時間行ふ。

自己催眠療法は前記の諸法を組立て成立して居る故に前述一、二、三、四、五、六種の法をよく間違はずに完全に行ひ得る様に修養し置く必要がある、其修養中殊に呼吸の計算を間違はずに、呼吸の事にのみ心が集まる迄、修養することが肝要である、一、二日にして其域に達する人が有る、又それのみに二週間も三週間も要する人がある、愈々間違はずに實行し得る様になつたらば、次の方法に移るのである、而して自己催眠療法に着手する前に尙心得置くべき問題二個ある、一は自己催眠療法にては、自己に如何にして治療暗示をするか、自己催眠療法時間は如何にして定め、其の時間が到達すれば如何にして覺醒するか、是である、此二問題に就き次に述べませう。



随意に覺醒し  
得る自己催眠  
者と否との別

自己催眠療法時間はどうして之を定むるかと思ふに、一時間催眠療法をしようと思はゞ一時間の後に覺醒すると堅く觀念して自己催眠療法に着手するのである。又時計が何時を報じたら覺醒しようと思はゞ時計が何時を打てば覺醒すると強く觀念して自己催眠療法に着手すれば如何に深く催眠して居つても、其時を報ずると直ちに覺醒する。催眠が浅いときには何時でも醒めようと思ふ時に醒めることが出来るが、催眠が深ければ豫定の時間に来なければ醒めない。

催眠中の暗示

第一段は催眠中の治療暗示である。自己催眠に依つて精神が鎮靜したときに今之れに依つて自分の脳神経衰弱は癒る。脳神経衰弱は癒りて健全になつた健全になつたと強く觀念するのである。即ち其觀念が暗示である。其場合に症候を一々觀念すると宜しい。例へば頭が不明快で、意志薄弱で、應接が

催眠後の暗示

下手であるとするれば之に由つて、頭は明快になつた。意志は強固になつた。應接は上手になつたと強く觀念するので、さうすると其觀念の通りになるのである。

第二段には催眠覺醒後に自己治療暗示を行ふのである。催眠が済み覺醒したら、直ちに眼目合掌して神を祈り、心力を凝め、言語に力を含めて、脳神経は健康になつた。脳神経は健康になつたと強烈に心力を凝めて發音するのである。其發音暗示をするときは拳固即ち手を堅く握つて上下に打振りつゝ、行はゞ其効果最も多いのである。

### 第三章 自己催眠療法を行ふ法

自分で自分を催眠せしむるにはどうして行ふか、即ち是は術者が被術者を催眠せしむる法を自分で自分に行ふのである。語り自分一人で術者となり被術者となるのである。他人に施術する方法を自分で自分になし得る。文行ふのである。そこで其要點を摘んで申ませう。靜かな室の中央に蒲團を敷き、

仰臥、四肢の  
固緩



呼吸の計算と観念

其上に仰臥し兩手を兩側に垂て強く握る、兩足を伸ばし兩足に力を入る、斯くして五分時間を経て兩手の力を緩める、兩足の筋を緩める、又二三分時間過て兩手を強く握る、兩足の筋を強く固める、呼吸を荒く深くして其呼吸を心の中で一から五十まで繰り返して數へる、それを數へること約十五分時間位して後は反對に呼吸を靜かに殆んど留めて居る様にして居り乍ら、兩手の筋と兩足の筋とをずつと緩める、斯くして次の如く観念するのである「頭の血は足の先へずつと下る」「心はずつと鎮まる」「ずつと鎮まると繰り返して観念する、其の場合に催眠中の自己治療暗示をするのである、さうすると精神が漸次鎮まつて手や足を動かすのが嫌になつて來る、恰も手足の血の循環が止まつた様に思はれることもある、さうして其の時に精神は尙ずつと鎮まる、鎮まると観念をして居ると、尙一層催眠は深く進んで、何も分らなくなる、さうなれば顯在精神は全く無想となつて、潜在精神のみが活動して居る状態になつたのである、之が即ち理想の深い催眠状態である、此の理想の深い催眠状態となれば、居ながら遠方の状況を見たり、死した兩親

催眠中の心持

と話をすることも修養次第によつて出来る。自己催眠状態にある人は、自分で自分を如何にして覺醒せしむるか、深い催眠状態となつて居れば、豫め定むる所の覺醒條件が到達すれば直ちに覺醒する、時間を定めて何時に覺醒すると定めて置けば其時間が來れば覺醒する、又時計が時報を報ずる音で覺醒すると定めて置けば時計の時報を報ずる音で覺醒する、催眠が浅ければ何時でも覺醒せようと思ふ時に覺醒する、とが出来来る、覺醒するには徐々に靜かに次第々に覺醒することが肝要である。

催眠の深淺によりて覺醒を異にする

覺醒の順序と注意

自己催眠の效能

先づ第一に足の先から次第に上の方へ覺醒して來ると観念し、足が動くやうになつたら、次に手が覺醒すると観念し、手が動くやうになつたら、次に顔から頭が醒めると観念し、最後に目が開くのである。自己催眠療法の効力は、催眠術療法の効力と同じである、只術者が患者に對して行ふ場合の如く、効果が顯著でない、併し催眠術療法にて癒し得る病癖は自己催眠にて悉く癒すことが出来る、尙自己催眠療法につき、詳しいこ



とを知りたい御方は、拙著「自己催眠を参照せられたい。」  
 最後に最も力を入れて注意すべきは實行である、實行せずして自己催眠療  
 法が行へないは、説明の悪しきではない、實行せぬ罪である、又四五日の實  
 験で甘く成功せざるとして廢めてはならぬ、百折不撓の精神を以て終生の行  
 事として行ふを要する、左すれば自己催眠療法は自然に成功し、心身亦強健  
 となる、吳々も注意すべきは實行である、實行である、實行である、理窟ではな  
 い、議論ではない、實行である。

患者の心身術  
 者の思ふ通り  
 に成る

## 第六卷 催眠遠隔療法

### 第一章 催眠遠隔療法とは何ぞや

催眠遠隔療法は術者と患者とは遠く隔り居りて催眠術療法を行ふ法であ  
 る、患者は術者より遠く隔たり居る即ち十里百里の遠くの自宅に居りなが  
 ら、術者の療法を受ける法である、遠隔催眠療法を修得し實行せんと欲せば、  
 先づ普通の催眠術療法即ち術者患者一室に相對坐して行ふ所の催眠術療  
 法に熟達するを要する、術者患者と二間位距て、居り、患者を催眠状態の第  
 二期即ち止動状態以上の催眠程度に進ませ置き、術者外形には何等の動作  
 を現はさずして、唯精神にて患者の手は舉がると猛烈に精神を集中すると  
 術者の精神は患者の精神に通じて患者の手が舉がる、手が下ると心力を凝  
 すと下る、口が開くと強く觀念すると患者の口が開く、口が閉ざると強烈に  
 觀念すると患者の口は閉づる、患者頭痛に悩まば術者が頭痛は癒ると強く



豫期心で癒る  
の精神感通  
によりて癒る  
のとは別

觀念すれば癒る、此實驗を幾百回も確に成功したる後に、催眠遠隔療法を行ふのが順序である、各種の精神療法にて遠隔療法を行ふが、術者と患者と相對して居り、實驗的に前段に述べし如き現象を起し得ざる法にては、遠隔療法の名ありて實なし、併し何等の實質なき法にては、治療の効果があることがある、稀には其れで大なる効果があることがある、其れは患者の豫期心で、斯くして貰ひし故確に癒ると信念したる結果、心身相關の理によりて癒つたので、術者の精神力が患者に通じて癒つたのではない、患者は遠隔療法を施さるゝ事を知らずに居りても、術者の精神力にて重病も癒し得る様に修養を積まなければ眞の遠隔療法にならぬ、去り乍ら凡そ總ての精神療法は術者の信念と患者の信念とが相合致する状態に在りて、初めて偉大の効果奏するるのである。

催眠は淺くて  
も効果は偉大  
である

催眠術療法を行ふ場合に、患者は深い催眠状態とならずとも、よく術者の精神力が感應するものがある、中には深い催眠状態に在り乍ら、精神力丈にてはよく感應せぬものがある、言語暗示加はりて始めて偉大の感應を現はすを常とする故に、單に催眠が淺いから遠隔療法の効果は少く、催眠が深いから治療の効果が必ずあるとのみ思ふは誤りである。

## 第二章 催眠遠隔療法の原理

精神療法の種類は何れを問はず、遠隔療法を行ひ得る原理は同一である、曰く生命の第一原理は、全能の靈である、個々人は此の靈の分身である、故人は其生命の根本に於て全能の宇宙靈と共通一如である、然るに人は個人としての差別的自我の精神能力を絶對に信じ、其れに執着して居るが爲めに弱小無力である、然るに若し一切の差別自我を超越して、生命の根柢に横はる靈其物と合致する時は、全能の境に入りて、居ながら遠方の病人を癒すことが出来る、而して此靈は神と言つても、佛と言つても可なるべきものである、眞に遠隔療法を行ひ得る精神力其物は、即ち神佛の働きてある、爰に所謂無我の状態とは、差別的自我を超越した境界である、自我を超越して靈と通じ、而して遠隔療法を行ひ得るのである、自我を超越し靈と通ずるには、完

宇宙靈と個人

超越意識



全なる精神統一によりて得らるべきものである。故に遠隔療法を行ふ場合には、先づ其の治療の觀念を定め、此觀念を一心不乱に護持して、精神統一を行ふと、感覺も觀念も自我も一切悉く消滅して、唯其の病氣を癒すとの觀念を抱いた儘で、超越意識境に直入する。其時術者の精神が遠地に傳達されて患者は健全になるのである。遠隔療法は超越意識の働きによるものであると言ふことを理解すれば、學理上明かに解決が出来る。

患者の精神状態が感受上に大關係があるに

無線電信を通ずるに發信機のみ完全で如何程電波を送りても、受信機が其働きをなさざるときは、電信の實が擧らざるが如く、催眠遠隔療法を行ふは、患者の精神状態が術者の精神力を感受し得る精神状態に非ざれば行はれぬ。患者は無我三昧で居る程よい、無我とは一切の精神活動を停止して空の状態に止住する事である。三昧とは或一定鏡に止住する事である。例へば一心不乱に念佛に止住して他意なきときは念佛三昧である。又佛の色身を觀じて一心不退なる時は觀佛三昧である。空の状態に止住するときは空三昧である。而して無我とは此空三昧の事である。患者が此空三昧の状態に自

電氣の正體と精神の正體と

無線電信の原理

ら居れば最もよく催眠遠隔療法は感應する。又催眠遠隔療法によりて其無我三昧の境を患者に與へんとするのである。

催眠遠隔療法は彼の無線電信の作用に能く似て居るが故に無線電信のこゝとを少しく述べませう。電氣は近頃非常なる進歩をなし、其實地應用の範圍の宏汎なること誠に驚くべきものがある。其電氣の正體が何物であるかに就ては、まだ何人も確乎たる斷案を下したものが無い。精神も又肉體の外にあるものであるが、肉體を離れては作用し得ない。人死するときは精神が肉體を離れたのである。電氣の器械は存しても電氣の作用起らざるに等しい。而して此精神の本體も又電氣の如く不明である。

無線電信(ワイヤレステレグラフ)は普通の電信の如く針金を用ひず、非常に高い電壓で周波の多い電氣を起して、空中に放電すると電波(エレクトリックウエーブ)と謂うて眼に見えないが、一種の波動を空中に送るので、此振動は瞬時に非常なる遠距離に達する性質を持つて居る。此性質を利用したのが即ち無線電信である。此電波が電信所に装置してある所の「コヒラ」又は檢



波器と稱するものに感ずると檢波器の電信の抵抗に變化を起し、從つて流れて居る電流に變化を起して之が信號をなすのである、即ち無線電信は長い柱を建て、其上方で火花を空中に飛ばして電波を起すのである、此電波は遠方にて同じ装置をしてある受信所のアンテナを通じて檢波器に感ずるのである。

精神も又無線電信機の如き働きをする、即ち術者は無線電信の發信機の如く、遠方に居る患者は無線電信の受信機の如くて、術者は遠方の患者に精神力を及ぼして、病氣を癒すことを得るのである。

### 第三章 催眠遠隔療法を行ふ法

術者は先づ普通の催眠術療法、即ち一室に術被兩者相對して居り催眠術療法を自在に行ひ、偉大の効果を擧げ得る實力を養ひ、經驗を積み而して後に催眠遠隔療法を行ふ修養を積み、個人の靈は宇宙靈と合致する様に修養するのである、其修養法としては、物慾を去り、神を祈り、常に深呼吸をなし、精神

術者は犧牲  
身を精神に富  
むを要す

肉體は人でも  
精神は神

患者術者に打  
ち明す可き事

は玲瓏として清らかなしめ、人の爲め世の爲には我身を犠牲に供し、何事も願みぬとの精神を養ひ、其精神は確乎不拔となりて初めて遠隔療法を行ひ得る人である、金儲の爲めに遠隔療法を行ふ様では眞の療法にならぬ、金に替へられぬ精神力を惜まず犠牲的に集注し、肉體は人でも精神は神となり、初めて効果が擧がるのである、又如何に術者の精神のみ具りても患者の心理状態如何によりては、効果更に顯れざることがある、之れ患者に修養法を行はしむる必要がある。

術者より遠く離れたる土地に在る患者が居ながら催眠術遠隔療法を受けんと欲せば、先患者の住所職業姓名年齢現在症既往症發病の年月日發病より現時に至る経過何々療法をなせし事及び其效否癒さんとする症候、夜よく眠るゝや否か、性癖、原因、頭の工合嗜好物、食慾、便通、神信心の有無、悲觀するか否か、悲觀せば其原因病氣の爲め寢て居るか否か、働き居るか否か、家庭内に精神療法を信ぜざる者の有無等病氣に關する一切の件を漏れなく記し、可成寫眞を添へて申込むのである、術者は之れ等の事項により考察して、此



患者は施術を引き受くべきか否かを定め、引き受くとせば如何なる方法を行ひ、如何なる暗示をなせば効果が擧がるかを定め、而して後に患者に修養法書を送るのである。

術者全力を凝らす法

而して施術の日時を確定し通知し置き、施術の時刻一時間前より術者は静坐し深呼吸をなし、神佛を禮拜し、愈々施術の時間到来せば、術者は自己の精神を没却して宇宙精神と同化し、遠方にある患者に心力を集注し、患者は催眠すると強烈に念力を送るのである、其時刻に遠方に在る患者は豫て送られし修養法書に基きて、成可無想となり居ると最もよい、然ると術者の精神力は無線電信の発信機の如き働きをなし、患者の精神は無線電信の受信機の如き働きをして、術者の精神力に患者の精神は感化され、重病も消て仕舞ふ。

### 第四章 催眠遠隔療法受術者修養法

精神療法は何れの療法にても修養法を遵守する必要がある、就中、遠隔療法にては最もよく患者が修養法を遵守しなければならぬ、其修養法を怠る氣

遠隔療法を絶き對に謝絶すべ

味の見えし患者に對しては、絶對的に遠隔療法は謝絶すべきである、遠隔療法を申込みし病人に對しては、術者は受術者に遵守せしむべき修養法書を送る、其修養法書には左の件を記入して置くのである。

#### 催眠遠隔療法受術者修養法

朝食前の修養

(一) 受術者は受術の日は朝早く起床し、冷水に浸せし手拭にて全身を拭ひ清め、鼻孔と耳孔とを殊に注意し清潔となし、手足の爪を切り髪を正しく梳り、折り目正しき衣服に着換へ、神社或は佛閣に參詣し平癒を祈り、神社或は佛閣の庭にて深呼吸を凡そ十分時間位なし、後に兩手を伸ばして前後左右に振ること數回、次に首を及ぶ丈け前後左右に振ること數回、次に吾輩は筋骨逞しき健康體の人である、と十回繰返し、次に「愉快愉快」と自分の年の數程唱ふ、此を唱ふるときは、口先にて唱へるにあらずして、腹の中より出したる音聲にて唱ふるなり、其唱ふる語は高聲程よきも、周圍の事情によりては、低聲にて唱ふるも可なり、斯くて自宅に歸るときは足を踏む毎に其數を算するなり、而して後に朝食を喫するなり、雨天又曇天に



雨天の日の晝  
食前の注意

就寝前の注意

て外出し難きときは座敷にて右の動作をなすのである。

朝食の前後一時間は決して新聞雑誌なりとも書見をなすべからず、而して勉めて精神に不快を感じずる事をば避けて、精神を平静ならしむる様、勉むべし、従つて精神が興奮する處の極端の喜怒哀樂及び珈琲茶酒の如き興奮性の飲料を避けなさい。

(二)前記の室外の散歩、神社佛閣の參詣、深呼吸、手足及び首の運動、唱へ事、足の踏敷の計算は晝食の前にも夕食の前にも行ふなり、而して食後一時間は決して腦を使はぬ様なすなり、若し勤人等にて此の(一)(二)を完全に行ふこと能はざる時は、準用して道を歩み乍ら行ふのである。

(三)午後夕食後寢室(受術中は成るべく一人一室にて寝るをよしとす)に種類の品物散亂し居らば整理して秩序正しくなし、よく掃除し布團を正しく敷き、準備を整へ置き、やがて晴天なれば室外に出で、ぶらぶらと散歩しつゝ、此夜受術すると自分は健康になる、屹度健康になると之を何回となく繰返すのである、斯くして散歩すること暫時にして歸宅し、受術時間の

寢後の心得

足指の屈曲

自己撫下

至るを待ち合すのである、若し受術時間迄に時間が餘程あるときは、其間に入浴すると最もよい。

(四)懸て受術時間が今廿分にて來ると云ふ時、手足を伸ばして動かさしつゝ、室内をぐるぐる三回巡りて、堅く手を握り、今夜深く眠りて翌朝起きて見ると身體の悪い處が取れて居ると自分の年の數程繰り返し、而して豫て敷きある布團の上に仰臥し、布團又は夜具をかけ、閉目をして兩足を伸ばし、時計の時間を眺め居りて豫て通知し置し、施術時間たらば、施術して下さる時間となつたと思ふと、燈火を薄暗くして次の如くするのである。

(五)足の指を屈しつゝ、其數を算し、一より五十に至る、若し中途にて計算を誤らば、又一に戻りて五十迄正確に算するのである、斯くて五十迄正確に算し終らば、次に自分の左右の兩手の平にて咽喉より胸部腹部に至る迄撫で下ぐることを自分の年の數程なし、次に右手にて左肩より左手を経て左手の先きに至るまで撫で下ぐることを自分の年の數程なし、次に左手にて右肩より右手を経て右手の先きまで撫で下ぐることを自分の年の



數程なし次に兩手の指先にて閉目せる目の上を中より外に向つて左右を同時に軽く撫でることを自分の年の數程なす次には兩手を身體の兩側に下げて腹式呼吸をなす。

腹式呼吸

呼吸の計算を誤らぬ人によく感應する

(六)腹式呼吸とは口を結んで空氣を鼻より深く吸ひ込みて下腹部迄空氣が入る様に思はるゝ如くすると共に下腹部を張らせ又空氣を鼻より出すとき下腹部を凹ますのである而して其下腹部が張りしときを一と算し凹みしときを二と算し又張りしときを三凹みしときを四と算し斯く順に算して五十に至り五十に至らば又一に戻りて算し初むるのである其計算を全く誤らず一より五十迄算すること三四回なれば必ずよく術者の術に感應し必ず病氣は除去せらる催眠が淺きとか效驗が少いとか思ふ人は必ず此計算を誤りて他の事を考へ居る人である斯る人の催眠の淺き治療の效の少きは自業自得である修養を積むと其惡習が消えて計算を誤らざる様になる計算を誤らざる様になると必ず顯著なる效果が顯はるゝ事疑ひない斯くて二十分時間位前の腹式呼吸を廢めず

催眠せし心持

修養順序の練習

け居り其れよりは呼吸を靜かに殆んど留めて居る様に呼吸の音が少しもせぬ様に靜かにして今催眠さして呉れる之で己は眠れる病氣は無くなりて健康となると思ひ居る然ると催眠し何も彼も忘れて全く無念無想となるものがある或は未だ周囲の音は聞え居るも手や足が布団に附着した様になりて自分で動かすことが嫌になつて居るものもある其れで既に催眠して居るのである此程度で充分に治療上の効果はある斯くて受術者は其催眠より睡眠に移り翌朝迄其儘眠りて居ると最もよいのである翌朝は早く起きて(二)に示せし如くするのである

催眠遠隔療法受術者注意書

(一)受術者は豫め修養法書を數回熟讀し實踐事項を順序よく間違ひなく行ひ得る様練習をなし置き愈受術の日に於ては滞りなく上手に行ひ得る様になし置くを要する

(二)君に對する施術の日は左の如くである



施術の年月日  
と時間

第六卷 催眠遠隔療法

自大正何年何月何日  
至大正何年何月何日

右三週間の間毎夜午後何時より何時迄施術す受術の時刻を正確にせん  
爲受術者は豫め時計の時間を郵便局或は停車場の時計又は太陽の正  
午に合せ置きなさい本會指定の時刻は東京の時間なれば甚だしく緯度  
を異にする外國に在る者は郵便局に照會の上正確に引合せ置きなさい。

(三)施術中は毎日一回必ず修養法を如何に遵守せしか呼吸は一より五十  
迄正確に何回算へしか及び其感應の模様を詳細に報告せられたい報告  
書は必ず十二行野紙に認むるを要す受術者は必ず此療法によりて全治  
すと確信し全治する迄は何年何月間を費すも引續き受術する決心にて  
あられたい此療法を三週間試み効果がなければ又他の療法を試みよう  
か他の術者に就て施術を受けて見んとか思ふ如き輕忽心あるものには  
施術を謝絶します故に若し斯くの如き輕忽心を有するものは此書を直  
に返戻せられたい。

報告と自省

施術回数と病  
症

(四)施術回数は三週間で一期とす初の週間は被術者の精神状態と  
感受工合とを見定めることを主眼とする次の週間は前週間に見た  
る受術者の精神状態に鑑みて根治する方針を定め實行の準備を整へ着  
着と歩を進めるのである愈々終りの週間に於て前二週間の成績と準  
備とによりて根治の策を施すのである故に初め一週間二週間位試みて  
催眠せざるとか治療の効が見えぬとか云ふて批評するが如き輕忽に流  
れてはならぬ感受性の高低と病氣の如何によりては一週間に全治す  
るものがあり五週間に十週間に要するものもある而し一期を三週間とな  
しある故一週間に治するも三週間は受術しなければならぬ三週間を  
経過し更に繼續して受術せんとするものは其ことを申込みなさい本會  
にては再び施術時間を通知して更に施術します本會にては無料と雖  
も一旦治療することを引受けたる以上は必ず全治せしめざる中は手  
引くことは絶対にしませむ而し受術者が術者の命ぜしことを眞面目に  
行はざる様子見えし時は施術を行ひませむ又行ひ初むるも中止します

第六卷 催眠遠隔療法



睡眠と催眠との差

被術者が自身で己は神經衰弱に罹り居ると思はゞ術者に就て直接に施術を受くる場合と雖も、施術回数には六回以上は必ず受くるを要す、二回で全治するものありと雖も、先づ普通六回以上受術し効果が見えぬ時、初めて施術の効果が見えざること口にするもよい、然るを假令直接受術する場合と雖も、初め一二回位の施術を受けしのみで催眠が浅いとか深いとか、効果が見えぬとか見えざるとか思ふ様の輕忽心は、堅く慎まなければならぬ、泥んや遠隔療法の場合に於ては、三週間を完全に受術し終りし後でなくて、効果の有無を他人に語るが如き輕忽心を起さざる様、呉れも御注意申上ます。

(五) 睡眠したる心持と催眠したる心持とは同様のもの、如く思ふ人あるも、其れは大なる誤りである、睡眠したると同様に思はるゝ様になる人も、催眠にては未だ周囲の音は聞え居るも手足が重くなりて動かすが嫌になつて居るときは既に催眠したのである、催眠状態は佛教に云ふ佛と同體となれる状態、神道に云ふ神に近づきたる状態である、従つて人格

深く催眠する人は人格の高

複式催眠球の必要  
 受術中積善の必要

の高き邪心なき人程深い催眠状態になるものである、依て若し催眠が深く進まざるとか治療の効果が少いとか思はるゝときは、精神の修養が足りぬからである、精神の修養に勉めないうて何か他によき催眠法はなきかと焦るは誤りである、催眠が思ふ程度に深く進まぬとか病氣が思ふ様に治せないのは、其人の先天的の性質によることがあるも、多くは何か術者の命ぜし修養法に違反せし點がある故である、よつて其場合は何れの點か術者の意に違反せしことなきか、心の持方が術者の云ふことに違反せしことなきか、と細心注意して三省し、若し違反せる點を發見したら此故である、と心附き、其違反せる點を矯正すると必ず理想の境遇を得られます。

(六) 受術者は複式催眠球を需めて、修養法中の腹式呼吸をなす際に、燈火を朦朧と點じ置き、天井より其球を吊し、今少しにて目を全く閉づると云ふ極細目にて眺めつゝ、腹式呼吸を行ふのである。

(七) 受術中は勉めて善事をなし、人に好かるゝ様人を喜ばしむる様に萬事なさなければならぬ、然ると精神は平靜を得てよく施術は感應し、受術者



の身上には善事が積ります。患者中此修養法書と注意書を熟讀し之をよく遵守する人は必ず重病も癒る、遠隔療法を受けて効果見えざりしと云ふ人は此修養法と注意法をよく實踐しない人である之を遵守することの出来ない重病人は單に施術の時に閉目して心を静め居れば其れにて充分に効果が擧がります、精神療法は何種を行ふときと雖も此修養法注意法を準用して遵守せしむると効果は非常に良い。

大正七年十二月二十日印刷  
大正七年十二月三十日發行



著作人兼  
發行人

東京市芝區琴平町三番地

古屋景晴

印刷人

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

中野鎧太郎

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

東洋印刷株式會社

東京市芝區琴平町三番地

發行所

精神研究會

電話新橋一八七五番  
振替口座東京三三五一番



# 精神療法研究家必讀珍書

古屋鐵石先生著

上製 八拾錢 並製 五拾錢 送料八錢

## 大珍書

秘密獨習  
成功確實

# 女催眠術

口繪

女催眠術家が不思議の實驗をなし居る處の寫真版數個挿入

此催眠法は精神療法研究の根柢にして被  
術者を一、神道に云ふ  
人合一、佛敎に云ふ  
眞如法性、基督敎に  
云ふ見神の狀態とな  
すにあり。

著者多年研究の結果、最近の發見になれる進歩せる催眠術を婦女子と雖も秘密に自宅にて獨習し、催眠療法を行ひ得る根柢を簡易に秘訣を講述せり、殊に精神的慰藉と人格の修養とに力を濺ぎ婦女子に關する面  
白き問題を解説しあり、讀んで面白き事不思議なる事  
小説以上なり。

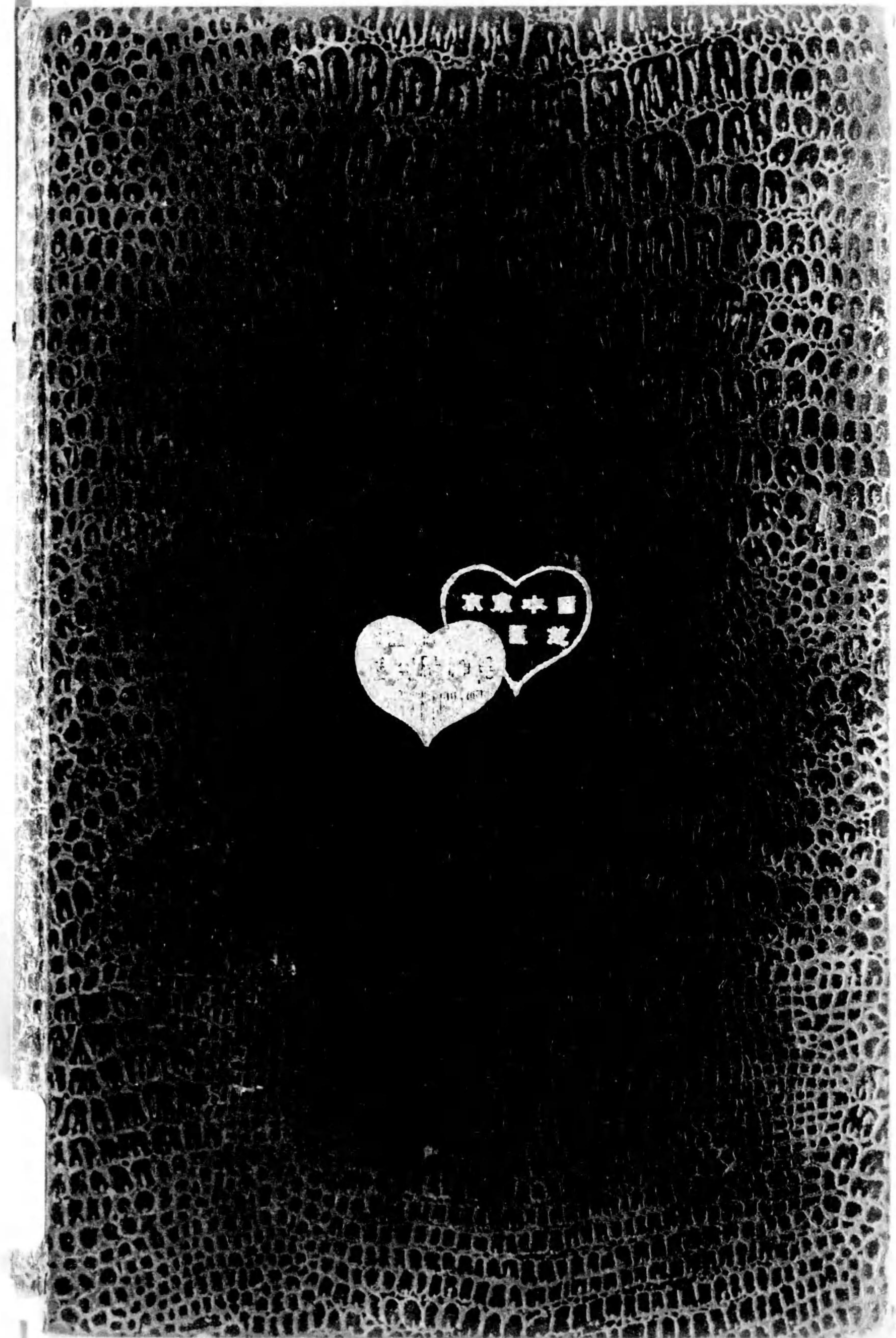
(精神療法之根柢)

此書は各種精神療法之根柢を解り



185  
177





東京帝國  
圖書部



終

